大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.80　　2022. 9. 1.

目次

写本を題材にした総合的な仏教研究の試み　1
2021（令和３）年度「指定研究」等研究成果報告　2
2021（令和３）年度「一般研究」研究成果概要　13
2021（令和３）年度　東京分室 PD 研究員個人研究成果報告　15
公開シンポジウム開催報告（2021.10.1～2022.3.31）　19
公開講演会・研究会開催報告（2021.10.1～2022.3.31）　22
国内研究調査報告（2021.10.1～2022.3.31）　25
海外研究調査報告（2021.10.1～2022.3.31）　27
彙報　29

写本を題材にした総合的な仏教研究の試み

大谷大学所蔵仏教写本研究　研究代表者　DASH Shobha Rani

大谷大学は 2022 年 3 月に、インド政府のインド文化交流評議会（Indian Council for Cultural Relations〈ICCR〉）によって設立された 2021 年度の仏教学振興賞（Award for Promotion of Buddhist Studies）を受賞した。このグローバルな賞の第一回目の受賞者に本学が選ばれたのは、インドの思想と文化への理解に取り組みつつ、仏教の精神に基づく教育と研究の、開校以来三百年以上にわたって蓄積された成果であることは言うまでもない。このようなことが可能になったのは、本学の多くの教職員の今までの努力の賜物である。この受賞によって、南条文雄を初めとする世界的に知られる偉大な研究者たちによって築かれた本学の伝統を継承し、さらに発展させていかなければならないという大きな責任がわれわれに与えられたのである。

このような名誉ある出来事と同時に、真宗総合研究所の 2022 年度の新しい取り組みの一つとして、「大谷大学所蔵仏教写本研究」という指定研究班が新たに設置された。大谷大学には、紙や貝葉などに様々な文字と言語で記された仏教に関する貴重な写本が数多く所蔵されている。その中でも、百年余り前にタイ王国から寄贈されたと言われるクメール文字、ビルマ文字などで書かれた貝葉写本はパーリ語仏典に関する膨大なコレクションである。本研究班はこれらの写本の保存、整理、公開と研究に専念することを主な目的とする。

仏教の写本研究と言えば、特定の文献の現代文字やローマ字への転写、校訂テキストの作成や翻訳などが一般的であるが、本研究班は本学所蔵の仏教写本をはじめとして、仏教写本を題材にして仏教の総合的な研究に取り組むことを目指す。

『法華経』など初期大乗経典に繰り返し経巻崇拝のことが記されている。その中で、経典の保存、伝播についても強調されている。そのことから人々の「信仰」が仏典を次の世代へと伝えてきたことが知られる。人は何を思って写本を作成し、何を思ってそれを保持し、そして何を思ってそれを次世代に伝えていったか、その土台には人々の信仰心がかかわっていて、ある種の「写本文化」を築き上げている。写本が作成されたあるいは書写された地域や文化や時代の様々な情報が含まれている。それを正しく理解することが、写本の正確な解読にも役立つと言えるであろう。

従って、本研究班は写本を単に文字を対象とする研究に限定せず、その背景にある「写本文化」をも重要視する。文献研究に留まらず、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアの文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことを目的とする。写本の伝統がまだ残っているインド、スリランカ、タイ、ミャンマーおよびその他の南アジア・東南アジアの国々の写本をめぐる仏教文化を比較し検討することにより、諸文化における仏教の受容性がより明確になるのではないかと思われる。

2021 年度より、ハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia（旧名：Classical Indology 古典インド学科）と「Digital Humanities and Manuscriptology」という共同研究プロジェクトを立ち上げ、様々な国に行われている写本に関する取り組みをオンラインワークショップや研究発表の形で紹介していただき、写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を定期的に行っている。これは、本研究所のデジタル・アーカイブ資料室の活動としておこなわれてきたが、今後本研究班で引き続き行う。

このように仏教写本の伝統文化が保持されている国々と、現代的な研究方法を用いて写本の研究に取り組んでいる国々の研究者や研究機関、つまり「もの」と「ひと」とのネットワークを築き、本学所蔵の仏教写本を正しく理解するとともに国際的に広く伝えていかなければならない。そして、仏教写本のこのような研究を入り口として、「人が書いた仏陀の言葉」からみられる仏教の受容性、変遷と意義の研究を切り開いていくことが期待される。

2021（令和３）年度「指定研究」等研究成果報告

特定研究

ｅラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・教授　木越 康
（真宗学）

大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと広く公開していくことを大きな目的として教育活動を展開してきた。この理念は、第三代学長・佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」で表明したことでもある。

佐々木は宗教としての仏教を、従来のように「寺院の殿堂から布教すべきことは勿論である」としながらも、「それと同時に之を今後また学校即ち教育の方から、正しく学として我国民に普及せしむべきものなることは、今更に言を要せぬことと思う」と述べる。そして仏教について「僧侶の専有物でない已上は、恐らくは仏教学もまたその宗その宗の専有物であってはならぬと思う。即ち仏教が万人の宗教である已上は、その仏教学も、また必ず万人の学たることをそれ自身要求して居る」と語り、真宗について「学内のみならず、宗教として世間一般の宗教的人格教養の源泉となり得ることを深く切望して止まぬ」と述べた。

大谷大学ではこうした理念に基づいて、これまでは主に、本学を会場とした公開講座や紙媒体での出版物などを通して行ってきたが、本研究班はさらにこうした理念を時代に相応した形で積極的に展開するために、「Ｅラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開」として、インターネットを活用した仏教教育研究を行うことを目的として活動してきた。本研究班の活動により、仏教ならびに真宗に関する新しい教育機会提供システムが開発されれば、これまで学習機会を得ることができなかった対象、たとえば在宅の一般の方々はもちろん、京都の大谷大学に来訪することが困難な宗教関係者、さらには海外に居住する方など、より広い受講者を対象に仏教・真宗を学ぶ機会を提供することが可能になる。

2019 年度から始まった本研究は、2018 年度、つまり COVID-19 の蔓延以前からすでに計画されたものであった。しかし 2020 年から現在に至るまで、未だ先の見通せないウイルスによる世界の混乱は、期せずして多くの人々の間でインターネットを介した情報交換や教育活動を推進させてきた。本研究班もその影響を受けながら、しかし活動面においては大きな刺激を受け、より有効なＥラーニングコンテンツの開発を目指して研究を進めることができたように思われる。当初は大谷大学の教壇で真宗学や仏教学を担当してきた者の講義を収録して配信することを考えていた。しかしインターネットを介した講義の経験によって、一層効果的な講義コンテンツ開発に向けたノウハウを蓄積でき、資料の有効的な活用や、一方通行とならないための工夫など、COVID-19 の影響下での経験が生かされた面も大きいように思われる。

本研究班では、こうした状況下で、当初の目的を達成するための第一段として、この２年間では、まず仏教入門に関するコンテンツ開発に着手してきた。これは全９回の構想のもと、釈尊（ゴータマ・ブッダ）の生涯と思想をテーマにした仏教入門講座の完成を目指すものである。「仏教・真宗」教育活動の展開には、仏教入門の他に真宗入門もあるが、まず仏教入門から着手した理由は、『改訂 大乗の仏道―仏教概要―』（東本願寺出版、2016 年）および同『資料編』（同、2019 年）というテキストがすでに揃っていることによる。つまり、Ｅラーニング実施に向けた課題の一つにテキスト開発があるが、仏教入門にはその基礎となる素材が揃っていると考えたからである。

本研究班では、定期的に開催した全体での討議を重ね、次のように全９回の講義を行うこととした。

第１回　はじめに　―仏教遺跡と仏教典籍―
第２回　仏教成立の時代背景
第３回　青年ゴータマの歩み　―誕生・四門出遊・出家―
第４回　沙門となったゴータマ　―出家生活と苦行の放棄―
第５回　苦の原因をたずねて　―縁起の観察―
第６回　最初の説法　―初転法輪―
第７回　仏弟子の誕生　―サンガの広がり―

第８回　釈尊の入滅　―自灯明・法灯明―
第９回　おわりに　―釈尊入滅後の仏教―

以上の全９回にそれぞれ担当者を配当し、講義原稿を作成して、それを全体研究会の俎上に載せ、内容について討議を重ねた。原稿作成者、つまり講義担当者はそれを受けて講義原稿を改訂し、完成させていった。また、そうした作業にあわせて、プレゼンテーションツールであるパワーポイントを活用し、有効な資料の視覚的提供の工夫にも着手した。写真や地図を持ちより、キーワードの提示や紹介する仏典の文章・言葉を検討し、資料として提示する準備を行い、それらを適宜、講義映像に取り込んでいく作業をすすめた。

そして研究班としての初年度である 2020 年 12 月には、９回中２つのコンテンツについてテスト収録を実施することができた。当初の計画によれば、2021 年度後期には半数分についてテスト配信を行い、2022 年度からの実運用開始に向けた態勢を整えるはずであったが、2022 年３月現在、９回中３つのコンテンツの試験映像の収録に留まっている。収録済みは、第１回「はじめに ―仏教遺跡と仏教典籍―」、第５回「苦の原因をたずねて ―縁起の観察―」、第７回「仏弟子の誕生 ―サンガの広がり―」である。他の回については、COVID-19 の影響ももちろんあるが、実際の収録に想像以上の工夫が必要となり、時間を取られてしまったため、現在未収録の段階である。ただし現在に至るまで、コンテンツの作成や収録経験も重ねることができているので、その他の回については、現行の策定が進めば、今までよりも比較的早く収録作業を進めることができるように思われる。現在各担当者による講義原稿も概ね出来上がっており、全体での討議や写真・地図等の資料収集が完了すれば、順次、試験撮影を実施していくことができると考えている。

したがって今後は収録作業とあわせて、テスト収録を終えている３本について、映像の編集作業が済んだものから順次テスト配信を行いたい。配信には、実際の公開を想定して、申し込み法や配信方法の確定、さらには、各回に設けられた Q&A の受信返信方法の検討など、技術的に確認すべき点も多くあるが、これらも研究の一環として、有効な方途を探っていきたい。

また今後の大谷大学内での安定的運用については、さらに検討していく必要がある。大谷大学の仏教教育の責任は冒頭に述べた通りであるが、そのような大学の使命に鑑みれば、今後のインターネットによる教育活動の展開は、一研究班が継続して担うべきものではないように思われる。今後は関係各位が協力して、特に適当と考えられる機関が母体となって、運用体制を構築していく必要があるであろう。そのための有効な形と、実運用開始に速やかに移行できる準備をあわせて進めていきたい。現在の所、大谷大学の幅広い仏教教育の展開が期待される「仏教教育センター」が中心となって担うのが継続性の上からも現実的であると思われるが、これについてはさらに慎重な検討を要する。また、本研究は仏教入門からさらに真宗入門講座の開設準備に取り掛かるが、これについては大谷大学の共通基礎科目である「人間学Ⅰ」担当者、特に真宗学科の教員とも連携して講義原稿を作成し、写真・年表・宗祖の言葉などを選定してコンテンツを完成させていきたい。将来的には、大学の「人間学Ⅰ」などの講義でも本研究によって製作したコンテンツを活用すれば、さらに有効である。

この２年間の本研究班の活動には、本学教員のほか、嘱託研究員として真宗大谷派教学研究所の松下俊英氏・難波教行氏の二人より、仏教学・真宗学の立場から適宜アドバイスをいただき、また撮影業務にも多大な協力を得た。特に松下氏には、実際に講義を担当いただき、収録を終えたことである。これも冒頭に述べた通り、Ｅラーニングによる教育活動は、全国に点在する真宗寺院を中心とする宗教関係者をも想定しており、二人からの意見は有用なものであった。また特に動画編集形式やパワーポイントの共通デザインの作成と実際の撮影に関しては、研究協力者である本明由美子氏より、専門的な技術と知識を提供していただいた。さらに、撮影会場の確保や機材の借用、その他撮影の技術的な指導に至るまで、教育研究支援課の皆さまにご尽力いただいた。本研究は、真宗学や仏教学の専門家だけでは成立しない内容のものであり、今後も多方面からの協力のもとで、研究活動を遂行していきたいと考える。ご協力いただいた関係各位に、心より御礼を申し上げる。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況にある。そうした動きに対応すべく、欧米とアジアの言語文化圏を担当する二つの班を置き、以下のようなテーマで研究を進めてきた。

①欧米班：真宗を中心とした仏教研究の動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

②アジア班 1）中国：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

2）ベトナム：2019 年度までの旧指定研究「ベトナム仏教研究」の成果をまとめる作業を中心とする。特に『日本仏教概説』のベトナム語訳を完成して出版する。

このような予定であったが、新型コロナウィルス感染症の流行が続いたため、2020 年度に続き 2021 年度も研究計画を大幅に変更する必要に迫られた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈欧米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

(1)『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

2017 年に大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが立ち上がった。それから 5 年間の予定で年 2 回（3 月にバークレー、6 月に京都で 1 回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に 2 冊の研究書（注釈付き本文英訳＋研究論文集）出版を目標とするが、2020 年度に続いて 2021 年度も新型コロナウィルス感染症の影響でワークショップは開催することができなかった。カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターと協議の上、対面での開催が可能になるまで延期するとともに計画の延長に関しても協議し、新たな協定書が年度末に締結された。

Ⅱ．国際学会・シンポジウム関係

(1) 国際仏教学会（IABS）第 19 回学術大会

2021 年 8 月 15 日（日）～20 日（金）に韓国ソウルで開催される予定であった国際仏教学会大会において、マイケル・コンウェイ研究員は「The Role of the Two Truths in Daochuo's Understanding of the Pure Land（道綽の浄土理解における二諦の役割）」という題で個人発表をする予定であったが、大会は新型コロナウィルス感染症流行により 2022 年 8 月 14 日（日）～19 日（金）に延期された。

(2) アメリカ宗教学会（AAR）年次大会

2021 年 11 月 21 日～24 日にアメリカ合衆国テキサス州サンアントニオにて開催されたアメリカ宗教学会に、アメリカの宗教研究の動向を把握し、東方仏教徒協会（EBS）の運営のために論文発掘および人脈の充実を図る目的で研究員が参加してパネル発表する予定であったが、新型コロナウィルス感染症の影響で渡航はせず、時差が許す可能な範囲でオンライン参加した。

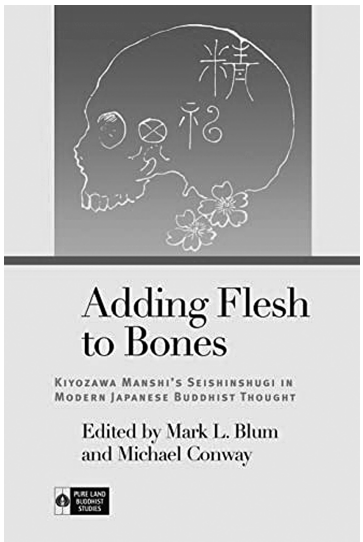
(3) シンポジウム成果の出版

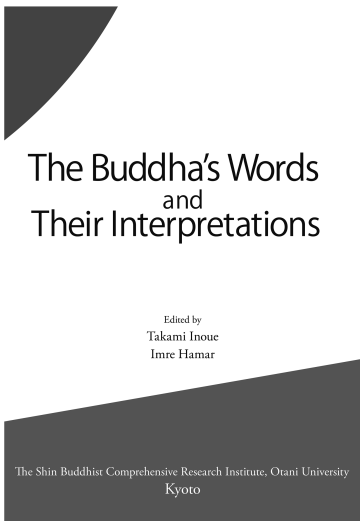
① *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版記念シンポジウム成果出版

2015 年 6 月 26 日（金）27 日（土）の 2 日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版（SUNY, 2011）を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・L・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から *Adding Flesh to Bones: Kiyozawa Manshi's Seishinshugi in Modern Japanese Buddhist Thought* として出版する予定で編集校正作業を進めてきたが、2021 年度中に無事すべての作業を終え、2022 年 4 月に発刊された。

②国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」（ハンガリー ELTE と共催）成果出版

2016 年 5 月 26 日（木）27 日（金）の 2 日間ハンガリーの ELTE 東アジア研究所との共催により開催した第 2 回共同シンポジウムの成果を、*The Buddha's Words and Their Interpretations*（The Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, Kyoto）として ELTE のハマル・イムレ教授と井上尚





実研究員の共編で 2021 年２月に真宗総合研究所から発行し、2021 年度中に関係機関に贈呈本を発送し、電子版を大谷大学学術情報リポジトリから公開した。

Ⅲ．公開講演会の開催

今年度は３回の公開講演会を開催する予定であったが、新型コロナウィルス感染症の影響により開催できなかった。次年度からはオンラインによる講演会を予定。

Ⅳ．The Eastern Buddhist Society 事業

(1) *The Eastern Buddhist*, Third Series Vol. 1 の発行

東方仏教徒協会設立 100 周年を機に第３シリーズをスタートさせ、第１巻の第１号と第２号を発行し、第２号には真宗近代教学の小特集を組んだ。

(2) EBS のウェブサイトのリニューアル

教育研究支援課の技術支援によってウェブサイトを全面的に新しくデザインし直し、バックナンバーをオンラインで閲覧しやすくした。

(3) EB 設立 100 周年記念事業

① 2021 年９月５日、本学を会場にオンライン開催された日本印度学仏教学会の第 72 回学術大会において、EBS 設立 100 周年の記念事業として「浄土教は現代思想の諸課題にいかに応えるか」というテーマのパネル発表を行った。発表者と題目は以下のとおりである。

ａ.「浄土教の過去・現在・未来」
平岡　聡（京都文教大学学長）

ｂ.「神あるいは自然（じねん）―スピノザと親鸞における内在の哲学―」　守中高明（早稲田大学教授）

ｃ.「親鸞浄土教における人間存在への視座と現代における意義 ―「優生思想」への対峙を中心に―」
藤元雅文（大谷大学准教授）

ｄ.「苦を問い直す―仏教のなかの哲学の立場から」
氣多雅子（京都大学名誉教授）

② 11 月のアメリカ宗教学会の年次大会において「The Eastern Buddhist Society: Past and Future（東方仏教徒協会―その歴史と将来について）」という題のもとパネル発表を行う予定で準備を進めたが、こちらは新型コロナウィルス感染症の影響で渡航がかなわず、2022 年度のコロラド州デンバーでの年次大会におけるパネル発表に延期することとなった。

〈アジア班〉

Ⅰ．中国社会科学院古代史研究所との学術交流協定に基づく研究活動

本年度も新型コロナウィルス感染症の影響により、相互の訪問による公開研究会を開催することができなかった。なお、2015 年 12 月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集について、翻訳作業を進めており、来年度の刊行を目指す。

Ⅱ．ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

『日本仏教概説』出版に向けた作業を行った。Pham Thi Thu Giang 嘱託研究員が日本語原稿の翻訳作業を行い、なお継続作業中である。なお、新型コロナウィルス感染症の影響により、相互訪問による詰めの作業を行うことはできなかった。来年度の出版を目標に準備を進めている。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

研究目的

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

（1）専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること

（2）重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開する

ことを目的としている。

また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。

以上の目的を達成するために、2021 年度は、以下の研究を行った。

1.『プトン仏教史』の校訂テキスト作成

プトン・リンチェンドゥプ（Bu ston Rin chen grub, 1290–1364）は、14 世紀チベットを代表する学僧である。チベット大蔵経編纂史上重要な役割を果たし、密教経典を所作タントラ・行タントラ・瑜伽タントラ・無上瑜伽タントラの 4 つに区分・分類する方法を確立するとともに、密教経典の最終形ともいえる『時輪（カーラチャクラ）タントラ』に対する詳細な注釈を施し、暦学に関しても大きな足跡を残すなど、チベット仏教史上で果たした役割を述べるなら枚挙にいとまない極めて重要な人物である。その代表的な著作『明示善逝説・仏教史善説宝蔵（*bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*』以下、通称である『プトン仏教史（*Bu ston chos 'byung*）』との名称を用いる）は、古くは E. Obermiller（1901–1935）による英訳（*The History of Buddhism in India and Tibet.* Heidelberg : In Kommission bei O. Harrassowitz, 1932）もあり、部分的には和訳がある（佐藤長『古代チベット史研究下巻』東洋史研究会、1959 年、pp. 845–873）。また、その翻訳仏典目録の箇所については、現行のチベット大蔵経所収仏典との対照を示した西岡祖秀による一連の研究がある（「『プトゥン仏教史』目録部索引」I～III、東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要 4～6、1981～1983）。このように『プトン仏教史』は、インド・チベット仏教史およびチベット大蔵経成立史を研究する上での基本資料として、具体的にはその第２章以降の部分について、これまで詳細な研究がなされてきた。その一方で、第 1 章「仏教概説」の部分は、校訂テキストや引用箇所の同定など基本的な作業が行われておらず、詳細な研究がなされていない。先述の通りプトンは、14 世紀を代表する学僧であり、後世に強い影響を与えた人物である。その「法」に対する定義や、経典の分類、聴聞や講説の方法などを記したこの第 1 章に向き合うことにより、チベット仏教における規範的な仏道のありようを明らかにすることができる。その意味で、この第 1 章の研究は、チベット仏教研究上で重要な作業である。そこで、本研究班では、この第 1 章「仏教概説」の部分について、本学所蔵のタシルンポ（bKra shis lhun po）版（no. 11841）をはじめとした各種版本・写本を用いた校訂テキストの作成を行なうこととした。今回の校訂テキストで用いたのは、次の木版本・写本である。

1）タシルンポ版
2）ラサ版（ショル Zhol 版）：13 世ダライ・ラマ（Thub bstan rgya mtsho, 1876–1933）の命令により 1917–1919 の間に開版された「プトン全集」の第 24 巻（ya 巻）に収録されているもの。
3）シャル（Zhwa lu）寺版：15 世紀後半に開版されたと思われるもの。本校訂テキストでは、Staatsbibliothek zu Berlin に所蔵されているものを使用した。
4）デルゲ（sDe dge）版：18 世紀後半に開版されたと考えられる。本校訂テキストでは、東洋文庫所蔵本を使用した。
5）ペルツェク・チベット古籍研究所（dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang）が編集し中国蔵学出版社より 2008 年に刊行されたウメー書体による「プトン全集」の第 24 巻（ya 巻）に収録されているもの。
6）東洋文庫所蔵ウメー書体写本
7）中国蔵学出版社刊行活字本：1988 年に刊行。「デルゲ版を基にして編集・出版した」と記載されている。

今年度が始まるまでに入手していたのは上記のうちタシルンポ版、ラサ版、シャル寺版、ウメー書体全集所収本、中国蔵学出版社刊行本のみであった。三輪悟

士 RA が中心となって、この５本の間の異読箇所の確認作業を行った。デルゲ版及び東洋文庫所蔵ウメー書体写本については、東洋文庫に出張、これを閲覧し、異読箇所を確認する予定であったが、予定していた時期がコロナ・ウイルス感染症蔓延のピーク時に当たったため、出張を中止し、複写を取り寄せることとした。結果的には複写を取り寄せたことにより、複数回の確認が可能となり、より厳密な校訂を行うことができた。複写を許可してくださった東洋文庫の関係者に感謝したい。こうして、校訂に用いる版本・写本が揃った後、２月～３月にかけて上野牧生研究員、三輪悟士 RA、三宅の３人で集中的に、どの読みを採用すべきかの検討とプトンが典拠とする文献の同定作業を行なった。

校訂作業の結果、次のようなことがわかった。語句の異同に関しては、タシルンポ版・デルゲ版・シャル寺版とラサ版・中国蔵学出版社刊行活字本・ウメー書体「プトン全集」所収本・東洋文庫所蔵ウメー書体写本の２つグループに分かれる場合が多く、『プトン仏教史』の版本・写本に２系統が存在する可能性を示している。中国蔵学出版社刊行活字本はデルゲ版をもとにしているとされているが、むしろラサ版をもとにしていると考えられる。典拠文献の同定作業としては、プトンが引用する 160 余箇所のほぼ全てについて、同定をすることができた。詳細は、刊行する校訂テキストの序文等で触れる予定である。

2.『モンゴル仏教史』の和訳研究

ケンチェン・パンディタ=イェシェー・ペルデン（mKhan chen paṇḍi ta Ye shes dpal ldan）により 1835 年に著された『モンゴル仏教史・宝の数珠』には、チベット語版とモンゴル語版の２つが存在している。モンゴル語のテクストは、W. Heissig, によるデンマーク王立図書館所蔵写本の影印刊行（Walther Heissig, *Erdeni-Yin Erike: Mongolische Chronik der Lamaistischen Klosterbauten der Mongolei von Isibaldan* (*1835*). Monumenta linguarum Asiae maioris, Series nova, Bd. 2, Kopenhagen: Ejnar Munksgaard, 1961）により、多くの研究者に知られてきた。チベット語のテクストについては、本研究班による宗林寺（富山県城端）所蔵・寺本婉雅（1872–1940）旧蔵チベット語文献中の木版本の翻刻・影印出版（松川節、伴真一朗、アリルディー・ボルマー、更蔵切主、三宅伸一郎（共編）『イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』：寺本婉雅旧蔵』大谷大学真宗総合研究所・西蔵文献研究班、2019 年）により、広く学会に知られることとなった。本研究は、このチベット語版刊行に引き続き、その研究を深化させるため、チベット語・モンゴル語のテクストを対照した上で訳注を施し、テクストの先後関係や、史料的価値を明らかにしようとするものである。訳注は伴真一朗嘱託研究員によって行われた。松川節研究員と三宅は、伴の作成した訳注原稿に目を通し、幾つかの修正意見を述べた。その成果として「イェシェー・ペルデン著 『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注（1）」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』39、2022 年、pp. 215–271）を発表した。分量としては、チベット語版の 6b5、モンゴル語版の 6r4 までの研究であり、全体の６分の１に相当する。内容としては、古代インド・チベットの王統から始まり、チンギス・ハーンの没年までの部分を扱った。

なお、この研究の過程で、本研究班が 2019 年に刊行したテクストに、入力ミスに起因する誤字が２点見出されたので、以下に示し、訂正しておきたい。

3a5: nus gcig → nub gcig
3b3–4: phu bo che ba gnyis nga mthun tshe → phu bo che ba gnyis dang ma thun tshe

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究
―西方寺所蔵文献の研究―

研究代表者・准教授　西本 祐攝
（真宗学）

■はじめに

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的に、その研究において重要な意義を有する西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）についての研究を行っている。

本研究では西方寺所蔵文献の影印（36 枚撮りフィルム 248 本分、総コマ数 8500 枚超）を所蔵している。これは、1998 年度から西方寺の全面的な協力をいただき、西方寺所蔵文献の蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成、写真撮影、内容精査等を行ってきたことによる。

それらのうち、現在、『清沢満之全集』（以下、『全集』と略）及び『全集』別巻等で公開済の文献はその３分の１程である。これは、『全集』が主に清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之が受講した講義ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれており、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生理学」「儒学」「数学・化学」「心理学」「語学」「和文学」等の受講ノートを確認することができる。これらは「清沢満之の思想形成を探る資料」としての価値を有し、また「関係教育機関でどのような教育がなされたのかという近代日本教育史の資料」ともなるものである。

本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016 年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。2018 年度から 2020 年度は『全集』別巻の刊行に専注したため、西方寺所蔵文献の校正を中断していた。

これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究であり、その内容精査とともに公開に向けた研究活動を継続している。

本年度は、西方寺所蔵文献について、まずはその全貌を再確認する研究に着手した。具体的には、次の二点を柱として研究活動を行った。

1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

以下に、その活動概要について述べる。

■活動の概要

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして 36 枚撮りフィルム 167 本分、総文字数 3,703,420 字である。2021 年度は、３カ年の研究計画に挙げた西方寺所蔵文献リストの作成に向けた活動を開始し、基礎的な文献確認作業を行った。リスト作成に向けた文献確認とともに、各文献の執筆年時、性格、内容を踏まえた解題を作成し、執筆年時が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行った。

その概要は、次の三点である。

1、西方寺所蔵文献のリスト整理
2、未公開文献の校正・整理・解題等作成
3、その他

1、西方寺所蔵文献のリスト整理

本研究は、西方寺所蔵文献の調査時の調査カードをもとにした文献リストを所有している。この文献リストは調査時に文献整理を目的として作成したものであり、文献ごとに通し番号を付し、それぞれの形態や法量などの詳細を記録したものである。

しかしながら、旧来の文献リストでは、本研究が所蔵する各写真のいずれが『全集』収録済・未収録かについて整理されていない。そのためそれらを明確に判別したリストを新たに作成する作業に着手した。旧来の文献リストは写真フィルム番号ごとに整理されているが、それでは全貌を把握していくには十分とは言えない面があり、フィルム番号内の写真番号（以下、写真番号と略）ごとに詳細に分類した新たなリストを作成する作業を行うこととした。

この方針に基づいて、以下の二つに分類して西方寺所蔵文献の新たな文献リストを作成しその充実をはかる作業を開始した。

Ⅰ.『全集』収録済文献リストの充実
Ⅱ.『全集』未収録文献リストの充実

Ⅰ.『全集』収録済文献リストの充実

『全集』収録済の西方寺所蔵文献リストを整理し、『全集』の収録巻・頁と写真フィルム番号・写真番号が対応するよう確認する作業を開始した。『全集』に

掲載された文献が西方寺所蔵文献の写真フィルム内のいずれの写真番号の文献に基づくかについてのより詳細なリストを作成することで、その対応関係を容易に確認することが可能となると考えられる。

この作業については、本年度内に、『全集』および『全集』別巻収録済文献について写真フィルム 82 本分（『全集』77 本分・別巻５本分）の作業を終えている。

Ⅱ．『全集』未収録文献リストの充実

『全集』等に未収録の未公開文献について確認していくために、その詳細な分類リストを作成する作業に着手した。西方寺所蔵文献には、一つの文献内に性格の異なる記述が複数存在するものを多く確認できる。例えば「漫録（F031～F034）」と題されるノートには「〔The Skeleton of a Philosophy of Religion.（草稿）〕」と題して『全集』別巻に収録した文献が含まれるが、同一のノート内に未公開文献も多く含まれている。未公開文献は和文文献と英文文献が混在しており、その内容も一つの文献としてリストに記載することは適切ではないものである。旧来の文献リストはそれらを明確に分類するものではなく、未公開文献の詳細を把握する上では十分ではない面があった。そのためノート内の記述ごとにその内容が区切られると考えられ得る箇所で区分し、文献名称の有無等を基準とする種別を示す分類記号を定めリストに記載していく作業を開始した。

この作業については、本年度内に、フィルム 104 本分の作業を終えている。

＊上記の通り、同じ写真フィルム内に『全集』収録・未収録の文献が混在している。そのためⅠ・Ⅱの作業で重複して確認したフィルムがあり、実際にⅠ・Ⅱで作業を終えたフィルム総数は 148 本分である。

2、未公開文献の校正・整理・解題等作成

これまでの本研究の活動で行ってきた未公開文献の校正作業に加え、未公開文献の各文献内容を把握していくために、上記したリスト作成と並行して、文献ごとの内容確認を踏まえた簡易的な解題（200 字程度）を作成し、さらには文献内の目次を付す作業を開始した。文献ごとの性格（講義筆録、メモ、目録、索引等）、執筆時期、執筆経緯等を把握していくことを目的とした研究活動である。

これらの作業において新たに執筆時期を確認できた文献がある。それらの成果を清沢満之の生涯と思想の研究に反映していくため、『全集』第９巻に掲載する清沢満之の年表に、その情報を加えていく作業を行った。これにより、これまで明らかになっていない清沢満之の生涯における事績や思想形成過程についても明らかにできることがあると考えられる。

これらの作業は、概ね以下の三点に分類できるものである。

Ⅰ．未公開文献の内容確認

Ⅱ．解題・目次の作成

Ⅲ．年譜の作成

文献内容の確認作業に際しては、未公開文献の写真と翻刻資料に基づいて丁寧に把握する作業を行った。解題・目次を作成する際には文献内に記される情報（執筆時期、講義筆録と思われる文献についての講義担当者、テキスト名等の書誌的な情報）を確認しつつ文献内容・性格等を明確にしていく作業を行った。この作業は、本年度内に、写真フィルム 115 本分について作業を終えている。

また、未公開文献内には清沢満之の学生時代の記録が多く残されている。これらを年譜に反映させていく作業では、各年の事績と並行して各在籍年度、期別ごとにその事績をあきらかにできるよう年譜の作成を進めた。これらの作業を通して、清沢満之の育英教校時代、帝国大学時代等における思想形成の一端を明らかにすることができるものと期待される。

3、その他

上記した１、２については、検討事項を隔週ごとのミーディング（前期期間中は、作業方針の確定のために毎週実施した）において確認しつつ、月１回の研究会議にはかり、確認作業をすすめた。その日程等については『所報』の彙報欄にて報告する通りである。

また、2022 年度は残りの文献についての確認作業を進めるが、これらは基礎的な作業であり、すべての文献について基礎的な確認作業を終えた後に、再度、それを踏まえて各文献についての個別の調査を行いつつ、『全集』未収録の全文献を確認していく必要がある。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、できるだけ確定する作業を重ねていく。検討内容の詳細については、本研究の研究成果として、本研究所『紀要』等にて報告していく予定である。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

研究代表者・教授　DASH Shobha Rani
（仏教学）

大谷大学史資料室は、大谷大学の公文書および大学の歴史に関する資料の収集、整理・管理を主な目的としている。そのほか、所有する資料の貸出依頼や閲覧依頼等の対応も行っている。

大学史資料のほかにパンフレットやノベルティなど大学発行物を保管していくことも目的としている。

2021 年度の主な活動として、①所蔵資料および寄贈資料の整理、②所蔵資料・データ調査・資料貸出、③所属している研究会への参加を行った。

①所蔵資料および寄贈資料の整理

本資料室が所蔵する資料、特に大判写真について保管場所の整理を行った。また、他機関からの寄贈図書、パンフレットの受入れ、整理を行い、その図書目録や機関の住所録を作成した。

②所蔵資料・データ調査・資料貸出

学外から 1 件、所蔵資料に関する問い合わせがあったため、資料室としてこれに対応した。また、学内からは 2 件、資料貸出の依頼があり、大学史に関する資料をそれぞれ貸し出した。なお、学内の依頼のうち一件は、博物館からの依頼であり、新年度の展示のために貸出を行った。

③所属している研究会への参加

全国大学史資料協議会西日本部会 2021 年度総会は COVID-19 の影響により書面による持ち回り開催となった。2020 年度事業報告・決算報告と 2021 年度の事業計画案・予算案が提示された。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

研究代表者・教授　DASH Shobha Rani
（仏教学）

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化したデータの整理・保管および研究資料としての公開にある。2021 年度の主な活動は、①大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開、②大谷大学が所蔵するパーリ語貝葉写本（以下「大谷貝葉」）のデジタル化、整理・保存・公開および研究の実施、③「大谷貝葉」のデジタル化と並行して『大谷貝葉目録』デジタル入力、データベースの構築、④デジタル・アーカイブ化および写本研究に関する国際ワークショップやセミナーの定期的な開催が挙げられる。

①大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開

大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースについて、今年度も登録作業を進め、今年度分とこれまでの分と合計すると公開準備件数は 212 件となる。また、2022 年 9 月時点での古典籍公開件数は 16,925 件となる。

②「大谷貝葉」のデジタル化、整理・保存・公開および研究の実施

「大谷貝葉」は、タイ王国より寄贈されたものである。パーリ語で書かれたこれらの貝葉写本を最適な技法を用いてデジタル化、整理、保存、公開および研究に関する現在の取り組みと将来の展望について日本パーリ学仏教文化学会で報告した。

③「大谷貝葉」のデジタル化と並行して『大谷貝葉目録』デジタル入力、データベースの構築

1995 年に大谷大学図書館が編集し、発行した『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』について、今後の研究に資するため 2020 年度よりデジタル入力作業を進めている。2021 年度もこれを継続して実施した。

④デジタル・アーカイブ化および写本研究に関する国際ワークショップやセミナーの定期的な開催

ドイツのハイデルベルク大学との共同研究プロジェクトの一環として、7 回の公開研究発表会を実施した。

東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究
―社会的価値観における宗教の役割の解明

研究代表者・准教授　井黒 忍
（東洋史）

1. 公開研究会の開催

2021 年 7 月 19 日（月）に山口瑞穂氏を講師に招き、オンラインにて公開研究会を開催した。報告のテーマは「戦後日本における外来のキリスト教系新宗教の歴史展開―エホバの証人を事例に―」である。

本報告では、日本において外来のキリスト教系新宗教のひとつとして位置づけられるエホバの証人の歴史展開から、運動のダイナミズムにおいて組織という要素が大きな位置を占める事例について検討した。エホバの証人は日本宣教の開始から 90 年以上が経過しているが、その展開においては、ホスト国である日本社会への適応以上に教団本部に対する日本支部の恭順的な関係性が課題となった。この点においてエホバの証人は、外来のキリスト教系新宗教の研究に対して、海外の本部との関係性の差異という新たな比較の視点を提示する宗教運動として捉えられる存在である。

報告の後、参加者との間で質疑討論が行われた。「統治体」と呼ばれるエホバの証人独特の組織形態やメンバー選出の方法、日本における信者数の状況や欧米における位置づけ、他国と比べて特に日本支部が世界本部に対して従順である理由、信者の経済的困窮が生み出す問題、教団外社会の価値観との矛盾や対立を克服する手段としての教団側の戦略的な法的対抗措置など、その組織および運営に関する質問がなされた。さらに、『ものみの塔』誌といった教団側の資料のみに依拠せざるを得ない場合、どのように教団と距離を取りつつ研究を進めるのかといった研究方法自体に関わる質問も寄せられ、報告者から丁寧な回答が得られた。

2021 年 11 月 15 日（月）に、西村晶絵氏を講師に招き、オンラインにて公開研究会を開催した。報告のテーマは「アクシオン・フランセーズとカトリック―極右政治団体とカトリックはいかに結びついたか―」である。

本報告では、1894 年のドレフュス事件を契機にフランス社会において台頭した極右政治思想団体であるアクシオン・フランセーズとカトリックの関係が論じられた。なぜアクシオン・フランセーズの思想はカトリックと結びついているのか、なぜカトリック教会はアクシオン・フランセーズを評価したのか、いつ、どのように両者の友好的な関係に変化が訪れたのかという三点の問いに沿って報告がなされた。

報告の後に行われた討論の内容は多岐にわたったが、二つの方向に大別することができる。一つ目は、フランス文学者アンドレ・ジッドの研究に関連するものである。当時のフランス社会においてジッドのマイノリティーの身分、作品の影響力、個人の信仰心を重んじる宗教観などが議論された。二つ目は、フランスにおけるライシテ（政教分離）に関する問題である。フランスにおけるライシテの形成と今日の問題、そして現代のヨーロッパ人権条約との矛盾に関する質問が寄せられた。西村氏からはライシテの概念をめぐる歴史的展開に触れながら、1960 年代から移民の増加によってライシテの価値観は当初想定していなかった局面に立ち至り、ライシテと信仰の自由との間に生じた矛盾が、現代フランス社会にとって切実な問題となったとの見解を得た。

2. シンポジウムの開催

2021 年 10 月 17 日（日）に、シンポジウム「仏教と障害―障害者運動の歴史的展開と、仏教から考える共生社会―」をオンラインにて開催した。報告者と報告タイトルは以下の通りである。廣野俊輔氏「地域で共に生きるための運動―青い芝の会を中心にして―」、頼尊恒信氏「親鸞思想から考える共生社会の在り方について―障害者と共に生きる―」、大河内大博氏「相模原事件と仏教者の社会的責任―グリーフから紡がれた声が届く共生社会を目指して―」。三氏の報告の後に、難波教行氏からコメントを得た。

廣野俊輔氏は、障害者解放運動を代表する活動団体の一つである青い芝の会が、互助団体として立ち上げた初期の活動から、脳性マヒ者の生存権を要求する権利型運動を経て、健常者による差別の事例を訴える告発型運動へと活動内容に変化が見られることを考察し、社会に与えた影響を述べた。

頼尊恒信氏は、親鸞の平等観・共生観に関して、共業する存在としてともに生きる「向下的平等観」であることを説明したのち、現代における真宗教団内での平等観や差別観についての問題を採り上げた。

大河内大博氏は、相模原事件を通して仏教者としての社会的責任を問いかけた。仏教者の社会実践の基本姿勢を「動機」（体）、「姿」（相）、「はたらき」（用）の 3 点から説明し、「共生」というキーワードを軸に議論を展開した。

難波教行氏のコメントでは、廣野氏の報告に対して、青い芝の会の告発型の運動からいかなる意義を学ぶことができるのか、現在の運動のあり方に変化は生じているのかが問われた。頼尊氏の報告に対しては、障害者とはいかなる存在を指すのか、親鸞思想における「如来の呼びかけ」や「あらゆる人々」に対する理解、現代の障害学の中で親鸞思想の意味が問われた。大河内氏の報告に対しては、報告中における「責任」や「責務」の意味、愚者の自覚と責務、菩薩行を果たすこととの関係が問われた。また、相模原事件の遺族のメッセージに関して、「語られない」ことの意味についても考える必要があるとの指摘がなされた。

2022 年 2 月 12 日（土）に、シンポジウム「宗教といのち―日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える」をオンラインにて開催した。報告者と報告タイトルは以下の通りである。鍾宜錚氏「台湾における「善終」の法制化と宗教的実践」、渕上恭子氏「韓国における終末期医療と尊厳死―「死の自己決定」と「死にがい」をめぐって―」、金田諦晃氏「緩和ケア病棟での活動から考える「良い死」―臨床宗教師の視点から―」。三氏の報告の後、藤枝真氏よりコメントが得られた。

鍾宜錚氏は、台湾における「善終」の概念が法制化・医療化した経緯と終末期医療の現場における新型コロナウイルス感染症の影響について報告した。自宅で死を迎えることを重視する台湾では、瀕死状態の患者を退院させて自宅で最期を迎えさせる「終末期退院」の慣行が存在し、終末期医療の法制化への背景となった。一方、病院で亡くなった人にも「善終」を迎えさせるように、延命治療の差し控え・中止に加え、「臨床仏教宗教師」による説法や「助念」儀式の実施が制度化されたとする。

渕上恭子氏は、韓国では 2018 年に「延命医療決定法」（「ウェル・ダイイング法」）が施行され、「尊厳死」が法制化されたことを踏まえ、その道程や背景にある病院死の増加、医療機関における「延命治療」の常態化、少子高齢化にともなう老人医療費の増大といった韓国社会における社会・経済的な要因が指摘された。さらに「延命医療」を中断・留保するための手続きやその現況が最新のデータを交えて説明された。

金田諦晃氏は、特定の教団への所属意識を持たない末期がん患者に対する臨床宗教師の活動と課題を論じた。現代の日本人には、教団への所属意識だけでは捉えられない豊かな宗教性、スピリチュアリティがあり、そこに配慮した環境を整えることが重要であると指摘した。

三氏の報告に対して、藤枝真氏よりコメントとして、西欧言語における「良い死」の原義（euthanasia）とその語の意味・用法の変化に関する歴史的経緯、「尊厳死」の語義解釈の多岐性についての解説がなされた。さらに、鍾報告に対して善終の持つ二面的な意味（死者本人と遺族にとっての善終）について、渕上報告に対して親の死に対する家族側の意識や自己決定「させられている」という問題、金田報告に対して所属意識を伴う宗派的なケアの意義について質問がなされた。

3. 座談会の開催

2022 年 3 月 2 日（水）に、大谷大学にて座談会「東京分室 3 年間（2019-2021）の活動を振り返って：可能性と問題点」を開催した。

参加者は井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿（以上は開催時の研究員、敬称略、以下同じ）と大澤絢子、西村晶絵（元研究員）であった。なお、当座談会は新型コロナ感染症の流行状況に鑑み、オンラインと現地参加を組み合わせたハイブリッド形式にて行われた。

第一部では各研究員の個人研究および共同研究の成果に関して報告がなされた。さらに、第二部では、共同研究に関連する幾つかの論点について、全体での議論を行った。共同研究の実施のプロセスに関して、テーマ選定作業の重要性と難しさ、成果公表の方法、個人研究と共同研究の関係、共同調査の重要性、研究成果の発信、大谷大学教員とのコラボレーション、外部の研究機関との連携の強化に関して、活発な議論が展開され、各研究員の率直な考えが共有された。

2021（令和３）年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

地質学からみた日本文化論の新構築

研究代表者・教授　鈴木 寿志
（文化地質学）

日本文化の形成に大地や地形・地質がどのように関わっているのか、特に精神面での関わりについて検討することを目的とし、地質学者と人文系研究者の協働を進めた。新型コロナウィルスの蔓延が続く中、本格的な現地調査を遂行できなかったため、主に近隣地域の調査と文献調査を行った。以下に個々の研究成果を記す。

1．愛知県北設楽郡設楽町の岩石信仰の現地調査を行い、宇連の磐座、コウゴ、お船石、蛇石、亀岩などを訪れ、岩石を同定した。
2．奈良県生駒市竹林寺、奈良市唐招提寺と東大寺の結界石について、現地において存在を確認し、岩石記載を行った。
3．兵庫県豊岡市の豊岡駅前にある「出世大師」（弘法大師像）について、石造物の伝説を確認し、石材を同定した。その結果、「出世大師」が島根県松江市産の凝灰質砂岩「来待石」でできていることを明らかにした。
4．中世・近世の京都に被害を及ぼした複数の歴史地震を対象とし、主に文献史料に基づいて被害実態や地震像の解明を行った。
5．万葉集一四一八番志貴皇子懽御歌に見られる「石激」「垂見」の表記と表現と、漢詩文の「激石」「飛泉」との関連について考察を行った。
6．『星の王子さま』『人間の大地』の作者、サン=テグジュペリの著作において、鉱物・地質・地球に関する知見がどのような形で表れているかを検討・考察した。
7．13 世紀初頭のドイツに成立したヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルツィヴァール』を主対象に、宮廷叙事詩という文芸ジャンルにおいて鉱石の描写がどのような役割を果たしているのかを追求した。

上記の１と２の研究において、地質学者の鈴木が同行することで、これまで明示されてこなかった岩石の種類を明らかにすることができた。設楽町には新生代新成紀中新世の設楽層群（1700 万～2000 万年前）や領家帯の花崗岩・変成岩などが分布する。設楽層群は火山性の堆積物や陸成・海生層を含む地層群であり、当初は火山岩が信仰の対象になっているのではないかと予想されたが、現地調査の結果、岩石信仰の対象はほとんどが領家帯の花崗岩であった。また奈良時代に建立された寺院において、僧侶が布薩を行う場を示す結界石を観察した結果、いずれも花崗岩製であった。日本列島は地質の多様性が高く、狭い領域に多種多様な岩石が産する。それにもかかわらず、本研究で調査した信仰対象や用いられていた石材が、ほぼ花崗岩であったことは興味深い結果となった。

３、４、５の研究において、日本の伝説、歴史史料にみられる地質の記載・地震の記録を検討した。万葉集の分析では、歌にみられる自然記述の中から、「岩」と「滝」に着目しつつ、漢籍の受容という視点から歌の解釈を考えた。

一方で、日本文化と対置される西洋文化において、地質がどのように捉えられているか、フランス文学とドイツ文学の例を検討した。『人間の大地』では、大地に意義あらしめるのは人間であるという視点が顕著である。またドイツ・宮廷叙事詩において、神性を備えた一鉱石がシンボルとして扱われる。

本予備研究において、各研究員の専門分野から「地質」に関する事項を取り扱い、研究を進めた。地質学からみた日本文化を論じるには、まだ多くの事例研究を進める必要があるが、現段階では次の２点をまとめの考察としたい。

・日本の奈良時代の石材利用や古来の岩石信仰において、花崗岩が好んで使われ、信仰対象となる傾向がある。花崗岩は大陸を構成する主要な岩石であり、朝鮮半島からやって来た渡来人の文化と関係するのかもしれない。
・万葉集では岩や水に関わる描写に詠み人の心象が反映されている。それに対し、西洋文化における岩石や鉱物は社会の象徴としての役割や、非生物である岩石や鉱物に意義づけるのは人間であるという、人間中心主義の観点が見られる。

個人研究

北アジア仏教史の間隙（15〜16 世紀）を埋める歴史学・考古学的研究

研究代表者・教授　松川 節
（人文情報学・東洋史学）

本研究は、アジア仏教文化圏の北限となるモンゴル高原において、今まで史料的制約から不明な点が多かった北元時代（14 世紀後半〜17 世紀前半）の仏教史を解明するために、近年、モンゴル国東部のスフバータル県トゥヴシンシレー郡およびドルノゴビ県イフヘト郡のヘセグバイシン遺蹟において見つかった16〜17 世紀に年代比定される複数の仏教寺院址を研究対象とし、日本とモンゴル国の歴史学者・考古学者が協働し、仏教寺院址の発掘調査・年代決定と出土文献の解読および編纂資料の読み直しを通して 15・16 世紀の北アジアにおける仏教伝播の諸相を解明し、新たな北アジア仏教史構築のための基盤形成を目的とした。

具体的には、トゥヴシンシレー郡の仏教寺院址出土遺物の研究・現地調査を計画し、三次元景観記録と年代比定のための試掘、周辺のモンゴル語・チベット語・漢語岩壁銘文の調査を企図した。

当初、2021 年 8 月にモンゴル国で資料調査及び現地調査を行うことを計画したが、コロナ禍の影響で国外への出張が実現できないため延期とし、モンゴル側共同研究者の Ch. アマルトゥブシン・モンゴル国立大学准教授、U. エルデネバト同大学教授が以前に行った現地発掘調査報告書に基づき、発掘経緯と出土遺物の年代決定に関して意見を交換し、さらに松川は遺跡周辺の岩壁銘文の画像資料の提供を受け、その解読に取り組んだ。解読の結果、これら岩壁銘文には、遺跡の年代（出土遺物の放射性炭素年代比定により 16〜17 世紀と思われる）と同時代のもの（ウイグル式モンゴル文字及びチベット文字）のほか、パクパ文字による 13〜14 世紀と見なされるものが存在しており、遺跡との関連についてさらなる現地調査が必要であるという結論に至った。

ここまでの研究成果は、2021 年 11 月 13 日に開催された 2021 年度日本モンゴル学会秋季大会にて発表した（U. エルデネバト、Ch. アマルトゥブシン，B. バトダライ、松川節「モンゴルにおける仏教の後期発展期に属する「ドブジョー」という遺跡について」発表時間 20 分）。内容は、モンゴル国スフバータル県トゥブシンシレー郡デルゲルハーン山付近で「ドブジョー１」という遺跡を初めて発掘調査し、彩色の仏像片、蓮華祭壇の一部が得られたことより、本構造物は仏教の祭祀遺址か寺院と関連することが明らかになった。出土した木材（白檀）破片から C14 年代測定を行ったところ、後 16〜17 世紀の年代を得た。これは、ハルハのアバダイ・サイン・ハン（1534〜1586）が第 3 世ダライ・ラマに謁見し、その後、北モンゴルの地にエルデネ・ゾー寺院を建立した時代と並行し、この年代の東部モンゴルにおける仏教趨勢を示す最初の寺院となる可能性が拓けた、というものである。

2022 年 2 〜 3 月、延期されていた現地調査が実現した。U. エルデネバト教授とともにモンゴル国スフバータル県トゥブシンシレー郡デルゲルハーン山付近の「ドブジョー１」〜「ドブジョー６」遺跡を巡検した。遺跡での調査は、外気温零下 20 度の環境下で短時間しかできなかったが、現地地形及び遺跡の分布状況を実見できたことはモンゴル高原における古代の仏教寺院の立地条件の観点から大いに参考になった。このあと、周辺の岩壁銘文として U. エルデネバト教授に未発表のサイトに案内していただき、ウイグル式モンゴル文字、パクパ文字墨書の存在を教えていただいたが、さらにその側に契丹小字の墨書を発見することができた。これにより、岩壁銘文の年代はパクパ文字（13〜14 世紀）からさらに遡り、10〜12 世紀に端を発することが確実となった。この岩壁銘文から 20 キロ離れた地点から「ドンゴイン・シレー遺跡」という突厥時代の巨大な複合施設が出土しており、その出土遺物の一部にも契丹小字が墨書されていた。何らかの関連が想定できそうである。

本研究の目的は、15・16 世紀の北アジアにおける仏教伝播の諸相を解明する点にあり、「ドブジョー」遺跡群がいずれも仏教寺院址であり、その年代が 16〜17 世紀であると判明したことにより、モンゴル高原東部におけるモンゴル仏教後期発展期の諸相が明るみにでた意義は大きい。またその副産物として突厥時代からモンゴル帝国時代の文字資料が新たに見つかったことも新たな研究対象となった。

今後の研究展望として、こうした新たな仏教の潮流を他の石刻資料や編纂資料から位置づけることが必要とされるであろう。

2021（令和３）年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

『教行信証』の解釈史の研究

研究代表者・元東京分室 PD 研究員　青柳 英司
（真宗学）

本研究は、親鸞（1173-1262）の主著とされる『教行信証』の解釈史を整理すると共に、その批判的検証を行うものである。2021 年度は特に、「教巻」に関する先行研究の整理と検証を実施した。本稿では特に、①「出世本懐に関する議論」と、②「仏仏相念に関する議論」の２点について報告する。

まず、①についてだが、親鸞は「教巻」において、「夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経是れなり」と述べる。親鸞が『大無量寿経』（『大経』）を真実教とした理由について、存覚（1290-1373）は、『大経』は出世本懐の経典であるため、真実教であると説明している。この理解は、以後の多くの研究に踏襲されるものである。

筆者は、鎌倉期の浄土教文献を広く調査し、浄土教や本願・念仏を説くことが、釈尊の出世本懐であるとする理解は、源空（1133-1212）とその門下の間で広く共有されたものであったことを指摘した。すなわち、『大経』を真実教としたのは親鸞の独断なのではなく、源空門流の共通理解を踏まえて、主張されたものであったと推測されるのである。

また、仏教一般において真実教の決定は、教相判釈という手段を用いて為されるのが一般的である。しかし親鸞は、「教巻」で教相判釈に類する議論を一切展開しない。しかも、親鸞は教相判釈という方法に、一切関心が無かったのではない。「信巻」や「化身土巻」、『愚禿鈔』などでは、教相判釈的な議論が展開されているのである。この理由を説明する先行研究も見られたが、十分なものではなく、この点は今後の研究課題であると言える。

他方、近年の研究では教相判釈的な発想を、「教巻」の解釈に持ち込むこと自体が批判されている。教相判釈は、他宗に対する自宗の優位を主張するものとして使われる場合が多く、そのような護教的・排他的な議論を、多様性が重視される現代において再生産することが、疑問視されているのである。そして、このような視座から従来とは異なる真実教の解釈も、複数提示されている。しかし、未だ議論は途上という印象であり、定説と言えるようなものは見られないのが現状であると思われる。

次に、②の「仏仏相念」についてだが、これは親鸞が「教巻」に引用する『大経』の文章の中に見られるものである。近世中期の研究では、この言葉を諸仏が互いに念じあうこととして理解する例が多い。しかし、本願寺派の僧鎔（1723-1783）になると、「仏々相念とは念弥陀三昧のことなり」（『本典一滴録』）とされ、同様の解釈は大谷派の深励（1749-1817）にも見られる。

しかし、この「念弥陀三昧」という言葉は、『大経』には見られず、親鸞自身も使っていない。一方、大谷派の鳳嶺（1748-1816）は『教行信証報恩記』において、次のように述べている。

> 古来の義に云わく。大寂定は即ち弥陀念仏三昧なり。釈尊、因位の行を念じて、阿弥陀仏の本願を説く。般舟讃に云わく。「三世諸仏依念弥陀三昧成等正覚」と。此の意なり。竹林鈔の下に、去来現仏仏仏相念の八字を引きて、妙覚の如来、弥陀の名号を称念するの義と為す。今謂わく。此れ等の義、経文未だ詳らかならず。諸仏、互いに諸仏の法を念ずるは、常の事なり。異義と為すべからず。然りと雖も、釈尊、今弥陀の本願を説かんと欲して、大寂定に入りて、当に念仏三昧の法を念ずべし。今文の阿難、諸仏の例を挙げて、今仏の事を察す。阿難、豈に釈迦の弥陀を念ずるを知らんや。
>
> （『真宗全書』21・25 頁）

ここに引用される「三世諸仏依念弥陀三昧成等正覚」という言葉は、善導（613-681）の『般舟讃』には見られず、西山派・顕意（1238-1304）の『浄土宗要集』にほぼ同文が見られる。また、『竹林鈔』も西山系の著作である。ここから、「古来の義」というのは、西山義系統の思想であると思われる。

つまり、僧鎔や深励、鳳嶺などは、西山派の著作を参照しながら、「教巻」を解釈していたと言えるのである。従来、近世宗学における他派典籍の受容状況は、あまり明らかにされてこなかった点であるが、ここはその一端が窺われる箇所であったと言えるだろう。

以上の２点を含む研究成果は、『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト』第４・５合併号（親鸞仏教センター、2022 年）に、「研究レポート」として掲載されている。

個人研究

「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理
――儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷

研究代表者・元東京分室 PD 研究員　鍾 宜錚
（生命倫理学）

本研究は、終末期医療に関わる意思決定と延命治療をめぐる家族の葛藤を分析し、終末期における「孝」の表現を検討するとともに、親子の関係性に基づいた終末期医療の倫理原則を提示することを目指している。台湾では、年老いた親の代わりに家族が医療方針を決定することが珍しい事象ではなく、親を最後まで看取ることが「孝」を実践する上で重要な行為であると捉えられている。終末期の医療方針を始め、看取り場所や介護の仕方など人生の最終段階に関わるあらゆる決定は、本人だけではなく家族と一緒に話し合った上で決めることが主流である。本人の希望と家族の考えが一致しない場合、個人の自己決定の尊重と家族の関係性の重視とのバランスをどう取るべきかが医療従事者にとって重要な課題である。

本研究は、儒教文化の核心の一つである「孝」の概念に着目し、終末期医療における「孝」の表現と「孝」に基づいた意思決定プロセスの可能性を探求してきた。2021 年度では、終末期医療の法制化で見られた「孝」の語りを道徳心理学の観点から検討した。終末期における「孝」の表現の二重性と、「孝」に基づく終末期医療の意思決定のあり方と家族の役割について、「二重孝行モデル」の理論に基づいて考察を行なった。その結果、終末期医療の意思決定をめぐる家族同士の合意形成について、「孝」の実践のもとで意思決定に関わり、本人の希望の達成を積極的にサポートすることは、終末期における家族の役割の一つの可能性であることを明らかにした。この研究成果をまとめた論文は研究紀要 39 号に寄稿した。

また、新型コロナウイルス感染症の流行により終末期医療の現場にも変化が見られている。諸外国と比べて感染状況が比較的に抑えている台湾ではあるが、パンデミックが長期化したことで、医療機関での面会制限により家族とのコミュニケーションをとる機会が減少し、意思決定に支障が出たケースや、最期に自宅での看取りを希望する患者が増加したとの変化が報じられた。さらに、2021 年 5 月に台湾での感染が急拡大したことで、ロックダウンに相当する厳しい行動制限が数ヶ月も及んだ。こうした感染拡大防止対策による終末期医療の意思決定への影響や、死に対する意識変化の有無に関する初歩的な調査成果をまとめた内容は 2021 年 11 月にオンラインで開催された日本生命倫理学会第 33 回年次大会にて発表した。

コロナ禍により海外への渡航が制限されたことで、研究方法は文献調査を中心に行ってきた。これからは、with コロナの時代における終末期医療のあり方や、家族の関係性、医療従事者の意識の変化について、現地調査も含めてさらなる検討を行いたい。

個人研究

現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究―1960年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して―

研究代表者・東京分室PD研究員　荻 翔一
（宗教社会学）

本研究は、現代における在日コリアンのキリスト者の信仰生活の特徴を明らかにすることを目的とするものである。

特に、1960年代以降の韓国社会におけるキリスト教の急成長などを背景に、在日コリアンが中心となるプロテスタント教会にニューカマーの韓国人が参与するようになったことが、在日コリアンの信仰生活にどのような影響を与えたのかという点に注目する。

前年度までに明らかになったのは、教会内における新旧コリアンの混在化が、在日コリアンにとって本国の韓国人とは異なる「在日の信仰」を自覚させるものとして機能しうる一方、ニューカマーの韓国人の参与が、必ずしも在日コリアンのエスニシティと信仰を結び付けるものとして機能していないことであった。

前年度に引き続き、コロナ禍によりインタビュー調査が難しいと判断したため、本年度は文献調査をもとに、ニューカマーの到来以前（1980年代以前）の在日コリアンキリスト者（特に二世）の信仰生活を明らかにすることを主目的とした。

扱った文献は、在日大韓基督教会の青年会機関誌（『燈台』）である。特に、『燈台』が発行され始めた1950年代後半から60年代前半の号を中心に分析した。なお、青年会は日本で生まれ育った二世が中心となるもので、当該時期の『燈台』は年に一回行われる修養会の講演内容や感想文が主に掲載されている。

現時点での知見は以下の通りである。

在日コリアン二世のキリスト者は、一世とは異なる信仰生活上の悩みや葛藤を抱えていた。同時期の教会は、基本的に韓国語礼拝のみで行われていたため、日本語が母語の二世にとっては疎外感を覚えることも少なからずあった。事実、「こんどの修養会は初めてですが、こんな素晴らしいものとは思いもしませんでした。というのは、神のみことばが強く私を教えているからです。教会では祖国語なので神のみことばを聞く機会が少いからです」（『燈台』11号、19頁）という記述がみられる。

青年会活動（修養会）や『燈台』は、単に信仰を深めるものとしてあるだけではなく、在日コリアン二世が交流・親睦を深め、二世に特有の信仰上の悩みや葛藤を共有・議論する場としても機能していたといえる。

在日コリアン二世のキリスト者は、家族や地域の同胞が集う一世中心の教会で信仰生活を送る傍らで、同世代の同胞が集う青年会にもコミットすることで、所属教会では満たされない宗教的欲求を充足していたと推察できる。

しかし各教会と青年会の活動は、必ずしも対立関係にあったわけではない。修養会では民族意識や愛国心を養うような機会も設けられた。その結果、「修養会に参加した収穫は、一、信仰心が強まり、二、愛国心が高まり、三、同胞に会えて友達になれたこと、四、国語の重要性を知ったことなどです」（『燈台』８号、21頁）といった感想も寄せられており、青年会活動を通して、各自が所属する教会への積極的な参与も企図されていたと考えられる。

そのほか、在日コリアンが日本社会で抱える諸問題（就職差別や参政権の是非）についても積極的に議論されてきた。その問題を信仰と結びつけて捉える言説もみられたが、この時期はやや具体性に欠けている。例えば、「総てを解きほぐし光を与えてくれるのは十字架の言だ」（『燈台』９号、３頁）や、「だから我らが、歴史的にどんな過程を踏んで来たとしても日本に住む韓民族も神によつて積極的な意味によつて現実の生の問題を解き将来への道標とすべきものがなければならない」（『燈台』11号、４頁）などの記述がみられる。

1970年代になると、『燈台』は修養会関連の記事を掲載するに留まらず、青年会のメンバー間が民族や信仰をテーマとする論考を発表・議論し合う言論空間へとその性格が変容する。そこでは一世が中心となる教会批判が展開されるなど、変革的な志向性がうかがえる。

今後は当該時期の分析を行うことで、「在日コリアンキリスト者」という彼ら／彼女らの自己像がいかに論じられ、信仰生活に反映していったのかを明らかにするとともに、1980年代以降の特徴と比較することで、ニューカマーの韓国人が与えた影響を考察したい。

個人研究

宗教及び胎児生命観の変容についての日台比較研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員　陳 宣聿
（宗教学）

第二次世界大戦以降、人口政策、出産環境、法律などの変遷によって、世界中多くの国々で胎児の生命感覚も徐々に変容していき、特に 1970 年代以降から医療技術の発展と共に、胎児は妊婦の身体の一部でありながら、当事者しか分からない胎動などの身体感覚を超えて、医療技術を介して客観的に感知できるような存在とみなされてきた。この状況の中に、人工妊娠中絶（以下は中絶）によって生じた道徳的葛藤が目立つようになり、流産、死産などの経験への対応も問われるようになってきた。上記の背景を踏まえて、報告者は日本と台湾を中心に、現代社会における胎児生命観の変遷と宗教との関わりについて研究を展開する。具体的に⑴「プロライフ運動」（胎児の生存権・生命権に立脚し、中絶の反対を唱える社会運動）と⑵「水子供養」（夭逝した胎児を弔う儀礼）の二つの現象に注視して、考察を行なっていた。以下二つの側面について、それぞれの成果を提示していく。

⑴日本と台湾における「プロライフ運動」の展開への考察：今年度の成果は以下三つがある。

①台湾における優生保健法をめぐる論争の整理：1985 年優生保健法の実施は、台湾において「中絶の合法化」とみなされる行動である。報告者は台湾の国会に相当する機関、立法院、の議事録を検討し、優生保健法の成立と修訂をめぐる論争を時系列的に分析した。特に 2000 年代以降に、政治の民主化によってより自由な展開が見えることが分かった。

上記の研究成果の一部は、以下の研究発表及び紀要特集に掲載する。学会発表：「台湾における宗教と中絶反対運動」（印度学宗教学会第 62 回学術大会 2021 年 6 月 20 日）、「台湾の『プロライフ運動』とその展開」（日本宗教学会第 80 回学術大会 2021 年 9 月 7 日）紀要特集：『宗教研究』95（別冊）2022 年 3 月号：94-95）

②日本における「生命尊重の日」の請願運動に関する情報収集：生命尊重センターは 1984 年から現在にいたるまで、日本において胎児の生命尊重を提唱する有力な団体である。報告者は、国会図書館に生命尊重センターの出版物、『生命尊重ニュース』を収集し、その成立と変遷について考察した。

③キリスト教のネットワークを通して国際的な展開：報告者は日本と台湾で「プロライフ運動」を唱える団体と接触し、オンライン形式のインタビュー調査及びオンラインでの集会での参与観察、2021 年 7 月 22 日東京で開催した「マーチフォーライフ」デモ行進での参与観察（検温、マスクとフェースシートの着用、徹底的な手洗いなどの安全対策をした上で行った）を通して、この社会運動は一国内のことと限らず、国際間の繋がりにも注意を払う必要があることと分かった。

⑵「水子供養」研究の深化：日本と台湾で行われた夭逝した胎児を弔う儀礼は、大学院時代から、報告者の研究関心の一つであり、特に組織的宗教を超えて、「民間信仰」の側面から考察を進めてきた。このような儀礼の背後に含まれた生命観を意識しながら、今まで蓄積した研究を深めることが目標である。

今年度、具体的な研究成果は「台湾の「嬰霊慰霊」研究の深化」である。日本の「水子」に相当する存在は、台湾で「嬰霊」と呼ばれる。報告者は博士論文の内容に基づき、台湾の嬰霊を慰撫する儀礼に関する考察を漢民族の死者救済儀礼の枠組みで再検討をし、自身の研究に位置付けることを試みた。その研究結果は以下の学会発表及び研究論文としてまとめた：「社会における胎児観の変遷―台湾の『嬰霊慰霊』を通して」（日本台湾学会第 23 回学術大会 2021 年 5 月 30 日）、研究論文：「台湾の「嬰霊慰霊」―死者救済儀礼の動態性に関する考察―」（採用、『日本台湾学会報』第 24 号に掲載する予定）。

以上は報告者の今年度の研究成果であり、今後は更に研究を重ねて、この二つの側面を通して、現代日本と台湾社会における胎児観の変遷と宗教との関わりを解明していくことに励む予定である。

公開シンポジウム開催報告（2021.10.1～2022.3.31）

仏教と障害―障害者運動の歴史的展開と、仏教から考える共生社会―

元東京分室 PD 研究員　青柳 英司

2021 年 10 月 17 日、東京分室が進める共同研究の一環として、公開シンポジウム「仏教と障害―障害者運動の歴史的展開と、仏教から考える共生社会―」を、オンラインにて開催した。

2021 年は、東京パラリンピックの開催があり、また 2016 年に発生した相模原障害者施設殺傷事件からちょうど５年の節目の年に当たる。この事件は、日本社会の中に優勢思想や障害者への差別意識が、根強く残っていることを如実に示すものであった。

では、相模原事件に象徴される障害者を取り巻く様々な問題に対して、日本の仏教――特に浄土教――は、いかに向き合い、誰もが平等に生きられる社会（共生社会）の在り方について、どのように考えることができるのだろうか。日本の仏教は、古くから社会福祉と強く結びついており、浄土宗の開祖である法然は「平等の救い」を重視したことで知られる。その弟子である親鸞もまた、同様の課題を持っていたと言える。彼らの思想を通して、日本的な共生社会の在り方を考えていくことは、十分に可能であろう。

しかし、この問題は現代の障害者運動と無関係に考えられるべきではない。現在、障害に対しては２つの考え方がある。

① 医学モデル：障害者が直面する社会的不利は、心身の機能の障害に起因するという考え方。

② 社会モデル：障害者が直面する社会的不利は、心身の機能の障害だけでなく、社会の側に原因があるとする考え方。

前者は、障害を個人の問題とする考え方であり、後者は、障害を社会の問題とする考え方である。現在、世界的に重視されているのは後者の視座である。すなわち、障害者は心身の機能の問題を抱えた人という意味だけでなく、いわゆる「健常者」を基準に作られた社会に障害されている人であるとするのが、現在の世界的な認識であると言える。本シンポジウムも、障害は社会の問題であるという視点に賛同し、この問題を鮮明にするために、「障碍」や「障がい」ではなく、「障害」という表記を用いた。

しかしながら、日本の仏教は伝統的に、医学モデル的な障害観が強い。そこで本シンポジウムでは、日本の障害者解放運動の状況や、浄土宗、浄土真宗の立場から考える現代的な共生社会の在り方について、それぞれご報告いただいた。報告者と報告タイトルは以下の通りである。廣野俊輔氏（同志社大学）「地域で共に生きるための運動―青い芝の会を中心にして―」、頼尊恒信氏（真宗大谷派大阪教区教化センター）「親鸞思想から考える共生社会の在り方について―障害者と共に生きる―」、大河内大博氏（臨床仏教研究所）「相模原事件と仏教者の社会的責任―グリーフから紡がれた声が届く共生社会を目指して―」。報告の後、難波教行氏（真宗大谷派教学研究所）よりコメントおよび質問がなされ、さらに参加者を交えた質疑応答がなされた。また、報告と質疑の司会は共に、東京分室 PD 研究員の青柳英司が担当した。

まず、廣野俊輔氏は、障害者解放運動を代表する活動団体の一つである青い芝の会が、互助団体として立ち上げた初期の活動から、脳性マヒ者の生存権を要求する権利型運動を経て、健常者による差別の事例を訴える告発型運動へと活動内容に変化が見られることを考察し、社会に与えた影響を述べた。1970 年代に起きた子殺し事件への訴えや、優生保護法の改正反対、車いす利用者の乗車拒否によって起きた川崎駅前の路線バスに籠城した川崎バス事件など様々な抗議運動を通して脳性マヒ者が被る不利や差別を訴え、障害者の権利の向上に貢献した一方、団体の規模が大きくになるにつれて運営上に混乱が生じ、介助者の組織として問題を抱えた点も示された。

頼尊恒信氏よりは、はじめに親鸞の平等観・共生観に関して、共業する存在としてともに生きる「向下的平等観」であることが説明されたのち、現代における

真宗教団内での平等観や差別観についての問題が取り扱われた。中村久子展に対する糾弾事件などの例から、真宗では差別について個人的問題（＝医学モデル）と捉えていることが明示され、差別を社会的問題（＝社会モデル）として捉える国際的な潮流とズレがあることが指摘された。以上を踏まえ、共生社会の具現化に向けて、①教学的な再確認と普及活動、②教学の具現化、③教団組織としての具現化の三点が提示された。

大河内大博氏の発表は、相模原事件を通して仏教者としての社会的責任を問いかけるものであった。氏は、仏教者の社会実践の基本姿勢を「動機」（体）、「姿」（相）、「はたらき」（用）の３点から説明し、「共生」というキーワードを軸に議論を展開した。まず「はたらき」だが、それはグリーフケアの立場では、グリーフに込められた声（主張・願い）を聞き取ることであるとされ、相模原事件に関係する遺族の語りを取り上げて、遺族にとっての「共生」の意味を描き出した。「姿」については、臨床仏教の概念および仏教の社会的責任として論じられた。相模原事件に関して、植松死刑囚の思想を特異なものとして捉えるべきではなく、誰しも自身の内部にある「植松/優生思想」に気付くべきことが共生社会を実践する国民/社会の義務だという。最後の「動機」は、仏教者自身の信仰と関係している。浄土宗の僧侶でもある大河内氏は、浄土宗の21世紀劈頭宣言で重視されてきた「願共諸衆生　往生安楽国」の考えを取り上げ、浄土宗の「共生（ともいき）」に関する概念を説明していた。中でも特に善導、源信が提示した共生（ぐしょう）を現代的意味の共生（ともいき）に読み替えた椎尾弁匡師の考えを述べた。最後に大河内氏は、仏教者の社会的責任を菩薩行にまとめ、結果（共生社会）が出るまで、行為（社会的責任）は完了していないスタンスを提示していた。

難波氏のコメントでは、まず廣野氏の報告に対して、青い芝の会の告発型の運動からいかなる意義を学ぶことができるのか、現在の運動のあり方に変化は生じているのか、「仏教」と障害に対する考え方などが問われた。次に頼尊氏の報告に対しては、障害者とはいかなる存在を指すのか、親鸞思想における「如来の呼びかけ」や「あらゆる人々」に対する理解、現代の障害学の中で親鸞思想の意味が問われた。大河内氏の報告に対しては、報告中における「責任」や「責務」の意味、愚者の自覚と責務、菩薩行を果たすこととの関係などが問われた。また、相模原事件の遺族のメッセージに関して、「語られない」ことの意味についても考える必要があるとの指摘がなされた。

なお、当日は、障害を有する参加者に対する情報保障のため、手話通訳者２名を配置するとともに、自動字幕作成のツールであるUDトークを併用した。

廣野俊輔氏の発表の様子

頼尊恒信氏の発表の様子

大河内大博氏の発表の様子

難波教行氏のコメントの様子

宗教といのち―日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える

東京分室 PD 研究員　陳 宣聿

2022 年 2 月 12 日（土）に公開シンポジウム「宗教といのち―日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える」をオンライン（Zoom）にて開催した。報告者と報告タイトルは以下の通りである。鍾宜錚氏（東京分室 PD 研究員）「台湾における「善終」の法制化と宗教的実践」、渕上恭子氏（慶應義塾大学）「韓国における終末期医療と尊厳死―「死の自己決定」と「死にがい」をめぐって―」、金田諦晃氏（東北大学）「緩和ケア病棟での活動から考える「良い死」―臨床宗教師の視点から―」。三氏の報告の後、藤枝真氏（大谷大学）よりコメントを頂いた。なお、当日の司会は陳宣聿（東京分室 PD 研究員）が務めた。

鍾氏は、台湾における「善終」の概念が法制化・医療化した経緯と終末期医療の現場における新型コロナウイルス感染症の影響について発表した。自宅で死を迎えることを重視する台湾では、瀕死状態の患者を退院させて自宅で最期を迎えさせる「終末期退院」の慣行が存在し、終末期医療の法制化への背景となった。一方、病院で亡くなった人にも「善終」を迎えさせるように、延命治療の差し控え・中止に加え、「臨床仏教宗教師」による説法や「助念」儀式の実施が制度化された。これらの取り組みに加え、昨今の新型コロナウイルス感染症の流行は、「終末期退院」による在宅死の実施や、病院での看取りに新たな課題をもたらした。また、自己決定の風潮が高まる中で「安楽死」の合法化を求める動きも見られた。終末期医療の法制化に伴って生じた死生観の変化、with コロナ時代における医療現場の取り組みなどについては引き続き考察する必要がある、と鍾氏が指摘した。

渕上氏の報告では、韓国では 2018 年に「延命医療決定法」（「ウェル・ダイイング法」）が施行され、「尊厳死」が法制化されたことを踏まえ、本報告のはじめに、その道程や、背景にある病院死の増加、医療機関における「延命治療」の常態化、少子高齢化にともなう老人医療費の増大といった韓国社会における社会・経済的な要因が指摘された。そののち、「延命医療」を中断・留保するための手続きやその現況が最新のデータを交えて説明された。報告の最後に、老境に差し掛かった韓国の人々が考える「尊厳死」・「死にがい」として、(1) 自ら延命を断り、家族の重荷にならないようにすること、(2) 自分の人生の最後の迎え方は、自分で決めること、(3) 子供たちに親の延命に関する難しい選択をさせないこと、(4) 自分の死後に、家族同士の争いの種を残さないこと、(5) 家族等に対する「最後の務め」を果たして逝くこと、の五つが提示された。

金田氏の報告では、特定の教団への所属意識を持たない末期がん患者に対する臨床宗教師の活動と、そこから明らかになった課題が採り上げられた。臨床宗教師とは、欧米のチャプレンをモデルとしたもので、被災地や病院、福祉施設等の公共空間において、布教を目的とせず、心のケアに関わる宗教者のことである。緩和ケア病棟に入院する患者の中には、スピリチュアルな苦悩に直面する者が少なくない。また、その苦悩を通して、生き甲斐や充実感をつかむ例も散見された。報告者はそれらを受け止め、学ばせていただくと共に、そのような営みが安心して行えるような存在を提供するために努力を続け、そのような機会や場が生まれる為のはたらきの一部となることを模索するという。その上で、現代の日本人には、教団への所属意識だけでは捉えられない豊かな宗教性、スピリチュアリティがあり、そこに配慮した環境を整えることが重要であるという指摘がなされた。

三氏の報告に対して、藤枝真氏よりコメントとして、西欧言語における「良い死」の原義（euthanasia）とその語の意味・用法の変化に関する歴史的経緯、「尊厳死」の語義解釈の多岐性についての解説がなされた。さらに、鍾報告に対して善終の持つ二面的な意味（死者本人と遺族にとっての善終）について、渕上報告に対して親の死に対する家族側の意識や自己決定「させられている」という問題、金田報告に対して所属意識を伴う宗派的なケアの意義について質問がなされた。その他、参加者からは「良い死」より「望まれる死」という用語が適切ではないか、台湾における小児の弔い、死者の尊厳に関するコメントや質問を頂いた。

公開講演会・研究会開催報告（2021.10.1～2022.3.31）

公開研究会「アクシオン・フランセーズとカトリック―極右政治団体とカトリックはいかに結びついたか―」報告

東京分室 PD 研究員　荻 翔一

本指定研究では、研究課題「社会的価値観における宗教の役割の解明」に基づく研究活動の一環として、「宗教の公共性」をテーマとした研究に取り組んでいる。今回は、フランス文学を専門とし、文学という切り口から近現代フランスの宗教、社会、思想を研究する西村晶絵氏（盛岡大学）を講師に招き、2021 年 11 月 15 日（月）に Zoom を用いたオンライン公開研究会を開催した。報告のタイトルは「アクシオン・フランセーズとカトリック―極右政治団体とカトリックはいかに結びついたか―」である。

本報告では、1894 年のドレフュス事件を契機にフランス社会において台頭した極右政治思想団体であるアクシオン・フランセーズとカトリックの関係が論じられた。特に、①なぜアクシオン・フランセーズの思想はカトリックと結びついているのか、②なぜカトリック教会はアクシオン・フランセーズを評価したのか、③いつ、どのように両者の友好的な関係に変化が訪れたのかという三点の問いに沿って報告がなされた。

西村氏によれば、アクシオン・フランセーズの中心的論客であったシャルル・モーラスが主張していたのは、カトリックの復興であり、普仏戦争で敗北したフランスを立て直すには、革命以前の社会体制（王政とカトリックという二つの軸に基づく社会秩序）を回復しなければならないということであった。こうしたアクシオン・フランセーズやモーラスの立場は、カトリック教会から好意的に受け取られたという。フランスにおいては、1905 年の政教分離法によって政治と宗教の切り離しが徹底されると、国内のカトリック教徒のなかには、自分たちが共和国政府から「迫害」されていると感じる者もいた。こうした政治的状況下で、公然とカトリックを擁護するアクシオン・フランセーズに、多くの信者・教会関係者は「支持者」として加わった。

しかしピウス 11 世時代（1922-1932）になると、共和国政府との「和解」を模索する教皇によってアクシオン・フランセーズが危険視され、アクシオン・フランセーズもまたそれを受け、教皇批判を行うようになり、対立するに至った。以上を通じ、ナショナリズムと宗教（カトリシズム）の結びつきが示されるとともに、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランス社会におけるカトリック教会の重要性が確認された。

西村氏の報告の後、参加者との間で質疑討論が行われた。討論の内容は多岐にわたったが、二つの方向に大別することができる。

一つ目は、西村氏がこれまで継続して取り組んできたフランス文学者アンドレ・ジッドの研究に関連するものである。当時のフランス社会においてジッドのマイノリティーの身分（同性愛者、プロテスタント）、作品の影響力、個人の信仰心を重んじる宗教観などが議論された。

二つ目は、フランスにおけるライシテ（政教分離）に関する問題である。参加者から、フランスにおけるライシテの形成と今日の問題、そして現代のヨーロッパ人権条約との矛盾に関する質問が寄せられた。西村氏からは、ライシテの概念をめぐる歴史的展開に触れながら、1960 年代から移民の増加によってライシテの価値観は当初想定していなかった局面に臨んだとの説明が得られた。さらに、ライシテと信仰の自由との間に生じた矛盾が、現代フランス社会にとって切実な問題であるとの見解を得た。

上記の二点以外にも、20 世紀初頭のフランスの社会背景（フリーメイソン、フランス人としてのアイデンティティー形成）、カトリック教会内部の意思形成と政治との関係性、極右団体としてのアクシオン・フランセーズの戦略などの側面からも質問が寄せられた。それぞれの質問に対しても、西村氏から丁寧な返答が得られ、充実した議論が展開された。

東京分室３年間（2019-2021）の活動を振り返って：可能性と問題点

元東京分室室長　井黒 忍

2022 年３月２日（水）に真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、座談会「東京分室３年間（2019-2021）の活動を振り返って：可能性と問題点」を大谷大学響流館３階マルチメディア演習室にて開催した。開催の目的は、2019 年４月から開始された指定研究「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」（研究課題「社会的価値観における宗教の役割の解明」）に関する研究活動を総括するとともに、東京分室における研究活動について、その可能性と問題点を整理し、今後の活動に益する知見をとりまとめることにあった。

参加者は井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿（以上は開催時の研究員、敬称略、以下同じ）と大澤絢子、西村晶絵（元研究員）であった。なお、当座談会は新型コロナ感染症の流行状況に鑑み、オンラインと現地参加を組み合わせたハイブリッド形式にて行われた。

まず、第一部として、各研究員の個人研究および共同研究の成果に関して報告がなされた。それぞれの概要は以下の通りである。

青柳英司は、個人研究として坂東本『教行信証』の訓点研究と、『教行信証』の解釈史の研究を実施した。前者は、親鸞が実践した独自の仮名遣いを、当時の口語に合った表記を模索する営為として捉えたものである。後者は、それぞれの時代や社会の中で、『教行信証』の言葉がどのように受け止められていったのかを探るものである。後者の一部は、科研費研究「近世における『教行信証』の創造的解釈―智暹『樹心録』の研究―」として実施した。さらに、共同研究として、鹿児島の「隠れ念仏」調査と、公開シンポジウム「仏教と障害―障害者運動の歴史的展開と、仏教から考える共生社会―」を企画した。前者は、宗教と社会が非友好的な関係に陥った例を調査したものであり、後者は、障害者を取り巻く問題に対して仏教がいかに向き合い、誰もが平等に生きられる社会の在り方について考えていけるのかを改めて問うたものである。これらの活動を通じて、別分野の研究者らとも、研究交流を実施することができた。

鍾宜錚は、台湾・日本・韓国を対象に、「孝」の文化が終末期医療の意思決定に与える影響と家族の役割を研究してきた。あわせて終末期医療における宗教の役割や「良い死」の概念にまつわる文化や習俗を考察しながら、共同研究のテーマに取り組んできた。研究会やシンポジウムを通して、日本と台湾における臨床宗教師の活動の実態と課題を比較することで、医療現場における宗教の可能性を具体的に認識することができ、大きな刺激を受けた。また、2019 年９月に実施した台湾調査をコーディネートしたほか、2022 年２月に開催された公開シンポジウムを陳研究員とともに企画し、自身も発表者として登壇した。東京分室研究員として大谷大学の一員になったことをきっかけに日本人の宗教観を再認識することができ、個人研究のテーマにも多様な視点をもたらすことができた。

荻翔一は、個人研究として在日外国人の生活やエスニシティに宗教がどのように関わり、影響を与えているのかという問題関心を背景に、在日コリアンのキリスト教信仰を調査・研究してきた。当初は聞き取り調査によって、近年韓国から来日したニューカマーの影響を考察しようと試みたが、長引くコロナ禍によって文献調査にその方法を変更しつつある。それにともなって現在は、戦後期における在日コリアン青年の生活課題（就職や結婚など）に対してキリスト教信仰や教会（あるいは青年会）がどのように解決を図ったのかという点に注目して研究を行っている。共同研究では 2021 年７月に、外来のキリスト教系新宗教の歴史的展開を研究している山口瑞穂氏を招いた研究会を開催したほか、各種シンポジウム・研究会の運営や共同調査（鹿児島）にも参与してきた。

陳宣聿は、「現代社会における宗教と胎児生命観の研究」を個人研究のテーマとする。具体的には水子供養」の日本と台湾比較研究と日本と台湾における「プロライフ運動」の２つのアプローチから研究を展開している。また、宗教学の視点から共同研究に携わり、特に鍾研究員とともに企画した公開シンポジウム「宗教といのち」が重要な成果である。東京分室での活動は、異なる研究分野の研究者との交流を通して、自身に刺激を与られることが魅力的であり、事務局側からの丹念な研究サポートに対しても常に感謝している。

大澤絢子が在職中に中心的に行ったのは、近代のメ

ディアと宗教と女性と仏教に関する研究である。前者に関しては、文学や雑誌など出版文化における仏教表象の展開を考察した。具体的には、伝記や文学上における親鸞イメージの展開、非宗教者による雑誌・書籍を活用した宗教運動、小泉八雲文学における説話から怪談への変容過程、物語と日本の宗教との関係を検証した。後者に関しては、近代日本における女性表象と宗教を主眼とし、親鸞の妻・恵信尼に関する近代の歴史研究の成果と文学の相互関係を明らかにしたほか、大正期の女性運動と宗教との関係性を考察し、学会で報告をし、論文を執筆した。また、分室の共同研究として女性と仏教をテーマとするシンポジウムを企画・開催した。2年間の研究活動を通し、「宗教と社会」との視点から日本文化史としての仏教を多角的に考察し、研究発信をすることができた。

西村晶絵の個人研究のテーマは、「第一次世界大戦前後のフランス政治思想とキリスト教――極右思想家とジッドの関係に注目して」であった。1894年のドレフュス事件以降、フランス社会で高まった排他的ナショナリズムにおいて、キリスト教思想がいかに関わっているのかを明らかにすることがその目的であった。共同研究の一環として、2019年12月から2020年1月にフランスにおけるキリスト教とイスラームの社会的影響力とその意義に関する調査を行った。1905年の政教分離法以降、非キリスト教化が進むフランス社会で、カトリック教会はどのような役割を果たしているのか、また、いまやフランス第2位の宗教であるイスラームとフランスはいかに共存しようとしているのかを明らかにすることを目指した。社会的にはライシテが強調される一方、人々の精神生活においては、宗教の果たしている役割が依然重要なものであることが確認できた。

続く第二部では、共同研究に関連する幾つかの論点について、全体での議論を行った。まずは、井黒が共同研究の実施のプロセスに関して、テーマ選定作業の重要性を指摘し、各研究員の研究テーマや分野を相互に理解した上で、テーマを設定することの難しさと面白さに言及した。また、当初は3年間での成果の公表を求められたが、研究体制が年年変化することなどから、成果公表の方法については議論の余地があるとした。また、他の研究班や科研費の共同研究とは異なり、テーマが先に設定されていない中で研究体制を組織し、共同研究を進めるのは極めて困難な課題であったが、シンポジウムや研究会、事前勉強会の機会を通して共同研究の方向性が明確になっていったとした。

次に、個人研究と共同研究の関係に関して議論がなされた。もともと共同研究が当該研究員公募への応募動機の一つであったとする意見もあり、共同研究の成果が個人研究にも活かされ、共同研究によって自身の研究方法では知り得ない事柄や方法、新たな切り口を知るきっかけとなったという意見があった。その一方で、個人研究と共同研究が有効につながらず、自分の研究を共同研究にいかに活かすかに悩んだという意見もあった。また、自身の専門分野が抱える問題を再認識することができたという意見もあった。今後はより幅広い分野の募集のため、多くのキーワードを併記するなど、募集方法の見直しも必要ではないかという提案がなされた。

さらに共同研究の方法に関して、共同調査の重要性が指摘された。新型コロナウィルスの流行によって、幾度かの共同調査を断念せざえるを得なかったが、研究員の相互理解を深め、共同研究の目的を明確にするためには、今後、共同調査を共同研究の一つの柱とすべきという提案がなされた。また、その際には遠隔地だけでなく、共同での近距離地での調査を実施し、他者の調査方法を知ることも有効であるとの認識が共有された。

研究成果の発信に関しては、研究会やシンポジウム以外の方法も考えるべきとの意見が出された。こうしたイベントはあくまで研究推進の一方法であり、方法が目的化しないように気をつける必要がある。大学における授業などを新たな成果発信の方法とするといった意見も出された。

また、これに関連して、大谷大学とのコラボレーションをいかに図るかという問題が提起された。一例として、リレー講義や市民講座、学部生向けの授業など、異なる形式での発信の可能性もあり、東京分室の活動を大谷大学の活動として、さらにアピールすべきではないかという意見が出された。その際には、オンラインの技術を利用して、大谷大学教員とのつながりをより強めるとともに、ネットコンテンツを充実化させ、外部に対してアピールを強めることで、他の研究機関との連携を強めていく必要性が指摘された。

全体を通して、活発な議論が展開され、各研究員の率直な考えが共有された。今後は提示された問題点を改善するとともに、多様な成果発信の形を模索しつつ東京分室の活動をよりアピールする必要があると考える。

国内研究調査報告（2021.10.1～2022.3.31）

愛知県北設楽郡設楽町の岩石信仰調査

一般研究（鈴木班）研究代表者　鈴木寿志・研究協力員（支援）吉川宗明

愛知県北設楽郡設楽町の大名倉地区では、現在洪水対策と水資源管理を目的とした設楽ダムの建設が進められている。設楽町では大名倉地区をはじめ、多くの地区で岩石信仰が見られる。一般研究鈴木班「地質学からみた日本文化論の新構築」では、ダム湖に水没する前に同地区および周辺の岩石信仰を早急に調査する必要があると判断し、2021 年 12 月 19 日と 20 日に現地を訪れた。

12 月 19 日（日）の午前 10 時頃、新城駅で鈴木と吉川が合流し、レンタカーで設楽町を目指した。10 時半過ぎに道の駅したらに到着し、豊橋市自然史博物館学芸員の一田昌宏氏と合流した。道の駅に併設された奥三河郷土館を訪ね、学芸員の金田直樹氏と設楽町文化財保護審議委員の加藤紘市氏、加藤博俊氏の案内で館内を見学した。その後、館内のミーティング室で打ち合わせし、岩石信仰の詳しい場所について説明を受けた。道の駅で昼食を取り、加藤博俊氏を除く５名で現地調査に出かけた。

まず宇連集落の後藤秀夫氏宅を訪ねた。裏山に露出する通称「宇連の磐座（山の神）」とショウゴ様を確認した。観察の結果、山の神は地質学的には領家帯の粗粒花崗岩であった（写真１）。その後、宇連集落の奥にある元禄年間の石碑を確認するが、墓石のようであることから、調査対象から外した。

次に光石山の斜面にある「コウゴ」を訪れる。多くの転石があるガレ場斜面上方に岩石が露出している。観察の結果、層状チャートが熱変性作用により珪化した領家変成岩であることが分かった（写真２）。その後、ダム工事現場に移動し、白鳥神社跡地を訪れた。ここで「大名倉の山の神」傍の巨石の周りにあったと思われる外輪石を観察し、領家帯の中粒花崗岩であることを確認した。この日の最後に、旧奥三河郷土館跡地に移設された盗人石を観察した。

翌日の 12 月 20 日（月）は、鈴木と吉川の２名で調査を進めた。まず宿泊したペンションみるくの後藤和治氏にお話しを伺った。氏は宮司の資格を持っており、設楽町内の複数の神社を掛け持っている。そのうちの一つが白鳥神社であったが、もともとの受け持ちではなかったため詳細は分からないとしつつも、山の神社の神体が石棒であることの証言を得た。

ペンションを後にした後、名倉カントリークラブを訪れ、後藤利浩氏の案内でゴルフコースを巡った。ここで小鷹神社の奥の院とされた「お船石」を探した。その結果、３番コースの縁の山中に「お船石」を発見し、存在を確認できた（写真３）。長さが 7～8ｍある細長い巨石で、かつて鳥居の礎石とされた円筒形の石材も認められた。観察の結果、細粒緻密な花崗岩であることを確認した。「船石の磐座」についてはゴル

写真１　宇連の磐座（粗粒花崗岩）

写真２　光石山の斜面のコウゴ（層状チャート）

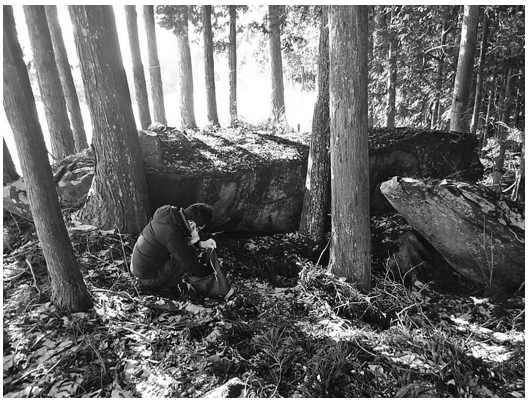


写真３　名倉カントリークラブの「お船石」

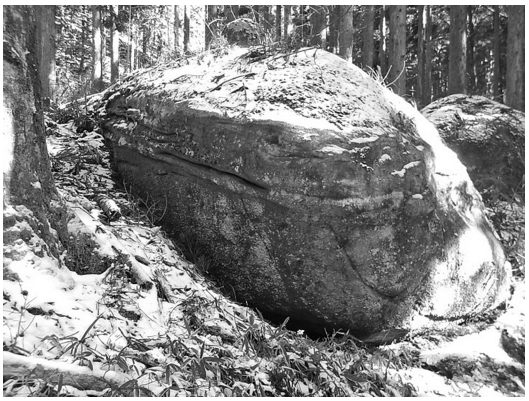


写真４　市之瀬地区の蛇石（片麻状花崗岩）

フ場内にあると推測されたが、それらしき存在を確認できなかった。

名倉カントリークラブを後にして、市之瀬地区の花立、立石、蛇石（写真４）を観察した。いずれも花崗岩ないしは一部片麻状を呈する花崗岩からなることが分かった。

次に神子谷下（みこやげ）の後藤忠禎氏を訪ね、赤子石を裏山で探したが、見つけることができなかった。その後、飛田山の石神の現況確認のため所有者とされる大蔵寺を訪ね、『大蔵寺記』を確認させてもらったが記述はなく、特定できなかった。寺の入口脇にあるオニカケ様を確認し、その背後にある卵形の石を観察した。珪質で非完晶質の火山岩とみられるが、正確な岩石同定はできなかった。

最後に亀岩を確認した（写真５）。粗粒砂～細礫を含む塊状無層理の砂岩である。亀岩の窪みの中にある亀の頭に相当する球状部は、一見球状団塊（ノジュール）と思われたが、堆積構造が不明瞭で成因ははっきりしなかった。

写真５　荒尾の亀岩（砂岩）

１泊２日の短い日程ではあったが、現地のみなさんのご協力により、多くの岩石信仰の地を訪れることができた。ここに調査に協力して下さった設楽町の方々に、厚くお礼申し上げたい。

海外研究調査報告（2021.10.1～2022.3.31）

「北アジア仏教史の間隙（15～16 世紀）を埋める歴史学・考古学的研究」モンゴル国現地調査報告

一般研究（松川班）研究代表者　松川 節

本予備研究の計画として「仏教考古遺物の研究と調査：モンゴル国スフバータル県トゥヴシンシレー郡の仏教寺院址出土遺物の研究・現地調査［三次元景観記録と年代比定のための試掘、周辺のモンゴル語・チベット語・漢語岩壁銘文の調査］」を策定し、2021 年８月の海外出張を予定していたが、コロナ禍により出国できず延期し、年度末の 2022 年２月になってようやく渡航が実現した。２月 11 日に京都市内で PCR 検査を受け、２月 12 日に関西空港に前泊し、万全の構えで２月 13 日に関西空港から仁川空港経由でウランバートルに向かった。仁川空港のトランジットではウランバートル行き航空機にチェックインする際に PCR 検査陰性証明書の提示を求められただけであった。モンゴル入国に際して PCR 検査が無かったのは想定外で、法定であるはずの３日間ホテル待機の指示もなかったが、念のため入国翌日から３日間はホテルに留まり、モンゴル国立大学の U. エルデネバト教授とオンラインで調査日程調整、調査地についての意見交換、調査地出土物について予備研究を実施した。なおこの三日の間にモンゴル国首相がモンゴル国はウィズ・コロナ路線をとることを明言し、今後一切の制限を解除すると宣言した。こうして今回の現地調査は何も制限なく行えることになった。

２月 17 日、市内最大の仏教寺院ガンダン寺を訪問し、学術文化研究所にて大谷大学博士候補生の N. アムガラン師と再会し、近年のモンゴル仏教の状況、博士論文の進捗について意見を交換した。今回の調査対象は今までにほとんど報告されていない仏教寺院址なので、アムガラン師も深い関心を寄せ、モンゴル人がチベット語で著した著作の中に関連する記述があるかどうか探索することを約してくれた。

２月 18 日、10:00、エルデネバト教授と共にウランバートル市を出発し、16:30 ヘンティ県チンギス市着。

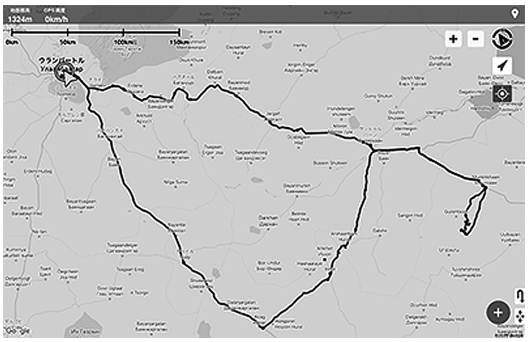
スミーン・ドブジョー第６寺院址とエルデネバト教授

ホテル泊。今回は零下 30 度の厳冬期の現地調査ということで野営は不可、三日行程のうち２泊ともチンギス市内のホテルに宿泊した。

２月 19 日、08:30、チンギス市発、10:05 スフバータル県ムンフハーン郡経由、11:27 同県トゥヴシンシレー郡のスミーン・ドブジョー第６寺院址着。この遺跡は「イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー」という名で 2019 年にモンゴル日本共同試掘調査が行われた。日本側代表は大阪大学の大澤孝教授で、詳細な調査報告書が公刊されている[1]。12:20 出発。12:40 アダギーン・ゴル岩壁銘文着。ここはエルデネバト氏が遺跡の調査中に偶然発見したもので未公表。ウイグル文字とパクパ文字の墨書があると教えていただいたが、なんとその側に契丹小字の墨書を発見。またウイグル文字のものはモンゴル語でなく古代ウイグル語の可能性がある。詳細は別稿で論じる予定である。

14:20 出発。14:25 デルゲルハンガイ山頂。14:50 スミーン・ドブジョー第２寺院址。調査。15:50 ハブツァリーン・アダグ岩壁銘文。この岩壁のパクパ文字墨書は 2007 年に龍谷大学の村岡教授とともに筆者が調査し、2009 年７月に中国雲南省で開催された第 16 回人類学民族学世界大会で報告したものである。パク

[1] 大澤孝，ツォグトバータル B.，大谷育恵，ルンデフ G.，バトダライ B.，アマルボルド Ye. 2021：「イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョーの調査（2019 年度試掘調査）」『金大考古』80，pp. 94-130.



2 月 18 日～20 日巡検ルート

パ文字墨書は 13～14 世紀のものであるが、今回、その他にも同時代のウイグル文字モンゴル語墨書の存在が判明した。18:40 チンギス市帰着。ホテル泊。

2 月 20 日、09:00 チンギス市発、11:37 ドルノゴビ県イフヘト郡オロン・バイシン遺跡着。オロン・バイシンは「多くの家屋」の意味だが、広大な敷地に点在するのは家屋ではなく一見して崩落した仏塔址である。学術的な調査・発掘は行われておらず、建立の時代は判明していない。12:51 同郡ヘセグ・バイシン寺院址着。オロン・バイシン遺跡の南南西 5.6 km に位置する。こちらの遺跡は 20 世紀初頭にモンゴル語の碑文が見つかっており、16 世紀末に建立されたことがわかっている[2]。オロン・バイシン遺跡とは一見して構造が異なっており、一群の寺院建築群と見なすのは早計である。しかし広い意味で、16～17 世紀の東モンゴルにおける寺院建築という範疇で検討すべきものの一つであり、出土碑文の内容が内モンゴル自治区包頭市ダルハン・モーミンガン連合旗のオロンスム城址出土の「アルタン・ハーン碑文」(1582 年) と極めて似通っている点も勘案する必要もある。

14:00 出発。15:41 ドルノゴビ県アイラグ郡にて幹線舗装道路へ。21:00 ウランバートル帰着。

2 月 24 日、エルデネバト教授とオンラインで調査結果の整理。

2 月 25 日、在モンゴル日本大使館の小山勲氏、伊藤頼子氏と面談。モンゴル国の文化財保護行政について意見を交換。2 月 26 日～28 日は別業務に従事した。

3 月 1 日、ホテルにて記録整理。午後、市内の指定病院で PCR 検査 (98,000 トゥグリグ ≒ 4,100 日本円)。ウランバートル市内は慢性的に交通渋滞が激しく、PCR 検査を受けてくるだけで半日仕事である。3 月 2 日、ホテルにて記録整理。午後、PCR 検査結果 (陰性証明書) 受け取り。日本の水際対策が続く以上、モンゴル出国日の前々日と前日は PCR 検査と結果受け取りに費やする必要がある。3 月 3 日、モンゴル出国。仁川空港へ移動。当日中の接続便が無いため空港内ホテルに宿泊。3 月 4 日：仁川空港発、関西空港着。帰国時の PCR 検査は陰性。法定の待機施設 (新大阪駅近くのビジネスホテル) に入所し 3 日間待機した。3 日目に PCR 検査を受け、陰性で出所。これで待機解除のはずだが、帰国時になぜか管理官がさらに 4 日間自宅待機と登録したため、出所後もしばらくアプリの現状確認ビデオ通話に煩わされた。しかし概して日本の水際対策はしっかりしているという印象を受けた。

[2] Б. Нацагдорж, “Хэсэг байшингийн хөшөөний бичээс ба XVI-XVII зууны үеийн монголын түүхэнд холбогдох хэдэн асуудал,” *Acta Historica Mongolici* T. XXI, pp. 110-147, 2020.

真宗総合研究所彙報　2021. 10. 1 ～ 2022. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2021 年 10 月 14 日㈭～10 月 22 日㈮17：00 まで
（サイボウズによる書面会議）

1．東方仏教徒協会規定改正について

◇2021 年 11 月 5 日㈮16：30～17：50
（博綜館５階第５会議室）

1．2022 年度「特定研究・指定研究・資料室」の研究計画について
　・指定研究　国際仏教研究
　・指定研究　清沢満之研究
　・大谷大学史資料室
　・デジタル・アーカイブ資料室
2．研究所紀要査読及び校閲について
3．客員研究員の受入れについて
4．その他
　・報告事項

◇2021 年 12 月 10 日㈮16：30～17：50
（響流館４階会議室）

1．『真宗総合研究所研究紀要』第 39 号投稿論文の査読結果について
2．東京分室 PD 研究員公募について
3．その他

◇2022 年２月３日㈭13：00～14：00
（響流館４階会議室）

1．東京分室 PD 研究員の採用について
2．真宗総合研究所規程の改正について
3．国際仏教研究歎異抄 WS に係る協定の更新について
4．その他

■Ｅラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

【研究会】

日　時：2022 年３月 23 日㈬17：00～18：30
出席者：木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄
　　戸次顕彰　本明義樹　松下俊英　難波教行
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：2021 年度の総括と新年度の活動方針等に関する打ち合わせ

【撮影】

日　時：2021 年 10 月 18 日㈪10：00～12：00
出席者：木越康　戸次顕彰　本明義樹　本明由美子
場　所：響流館４階プレゼンテーションルーム
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：木越康）

日　時：2021 年 12 月 24 日㈮10：00～12：00
出席者：木越康　戸次顕彰　本明義樹　本明由美子
場　所：響流館４階プレゼンテーションルーム
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：戸次顕彰）

日　時：2022 年３月７日㈪10：00～12：00
出席者：木越康　戸次顕彰　本明義樹　松下俊英
　　難波教行　本明由美子
場　所：響流館４階プレゼンテーションルーム
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：松下俊英）

■国際仏教研究

◇ミーティング

日　時：2021 年 10 月８日㈮10：40～13：00
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
参加者：Michael J. Conway, Mark L. Blum（Zoom）, Wayne S. Yokoyama
議　題：『*Adding Flesh to Bones*』索引作成について

日　時：2021 年 10 月 30 日㈯10：40～13：00
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
参加者：Michael J. Conway, Mark L. Blum（Zoom）, Wayne S. Yokoyama
議　題：『*Adding Flesh to Bones*』索引作成について

■EBS

◇EBS 公開セミナー

2021 年 10 月 25 日㈪14：40～16：10
2021 年 11 月 22 日㈪14：40～16：10
2021 年 12 月 20 日㈪14：40～16：10
2022 年１月 24 日㈪14：40～16：10
2022 年２月 28 日㈪14：40～16：10
講　師：Michael J. Conway
場　所：響流館４階会議室

◇EBS 編集会議
日　時：2021 年 10 月 22 日㈮17：30～
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、
Michael J. Conway、新田智通、
John LoBreglio（Zoom）、山内美智、
岡田治之、筑田一毅、藤枝直子

日　時：2021 年 11 月 19 日㈮16：30～
場　所：EBS 事務局
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、
Michael J. Conway、新田智通、
John LoBreglio（Skype）、藤枝直子

日　時：2021 年 12 月 17 日㈮17：00～
場　所：EBS 事務局
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、
Michael J. Conway、新田智通、
John LoBreglio（Skype）、藤枝直子

日　時：2022 年 1 月 28 日㈮17：30～
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、
Michael J. Conway、新田智通、
John LoBreglio（Zoom）、山内美智、
岡田治之、筑田一毅、藤枝直子

日　時：2022 年 3 月 18 日㈮16：00～
場　所：EBS 事務局
出席者：Robert F. Rhodes、井上尚実、
Michael J. Conway、新田智通、
John LoBreglio（Skype）、
David White（Skype）、藤枝直子

◇東方仏教徒協会運営委員会
日　時：2022 年 1 月 31 日㈪13：00～14：00
場　所：博綜館 5 階第 5 会議室
出席者：木越康、高井康弘、柘植至、江森英世、
Dash Shobha Rani、井上尚実、
Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、
新田智通、山内美智、岡田治之、藤枝直子、
筑田一毅

◇東方仏教徒協会顧問会議
日　時：2022 年 2 月 9 日㈬13：00～14：00
場　所：しんらん交流館会議室 ABC
出席者：木越渉、酒井良、延澤栄賢、木越康、
江森英世、井上尚実、Robert F. Rhodes、
山内美智、蒲池誓、岡田治之、筑田一毅、
小野真、奥村雄一、岩﨑千裕、藤枝直子

西蔵文献研究
【研究会】
◇イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史』の訳注研究
日　時：2021 年 10 月 25 日㈪14：30～18：00
場　所：真宗総合研究所内
出席者：伴真一朗・松川節・三宅伸一郎
伴真一朗嘱託研究員を招聘し、研究紀要に投稿した原稿の確認を行なった。

【研究打ち合わせ】
◇2022 年 3 月 15 日㈪14：00～15：30
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：上野牧生・松川節・三輪悟士・三宅伸一郎
今年度の研究の進捗状況を確認した。

清沢満之研究
【ミーティング】
◇第 10 回
日　時：2021 年 10 月 4 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 11 回
日　時：2021 年 10 月 18 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 12 回
日　時：2021 年 11 月 8 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 13 回
日　時：2021 年 11 月 22 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 14 回
日　時：2021 年 12 月 6 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 15 回
日　時：2021 年 12 月 20 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 16 回
日　時：2022 年 1 月 17 日㈪15：30～17：00
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 17 回
日　時：2022 年 2 月 8 日㈫13：00～14：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

◇第 18 回
日　時：2022 年 3 月 7 日㈪13：00～14：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：文献リスト作成作業報告と検討

【全体会議】
◇第 6 回
日　時：2021 年 10 月 28 日㈭18：00～19：30
出席者　西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、名畑直日児、山雄優生、藤井了興
会　場：ミーティングルーム
目　的：清沢班作業全体の進捗状況報告
作成リストの内容検討
研究計画の共有

◇第 7 回
日　時：2021 年 12 月 2 日㈭18：00～19：30
出席者　西本祐攝、福島栄寿、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：ミーティングルーム
目　的：清沢班作業全体の進捗状況報告
作成リストの内容検討

◇第 8 回
日　時：2022 年 1 月 20 日㈭18：00～19：30
出席者　西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：ミーティングルーム
目　的：清沢班作業全体の進捗状況報告
作成リストの内容検討

◇第 9 回
日　時：2022 年 2 月 17 日㈭14：00～15：30
出席者　西本祐攝、一楽真、福島栄寿、西尾浩二、名畑直日児、山雄優生、藤井了興
会　場：ミーティングルーム
目　的：清沢班年間作業報告
作成リストの内容検討
外部からの協力要請について

■デジタル・アーカイブ資料室
【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト公開研究発表会】
日　時：2021 年 10 月 25 日㈪16：15～17：45
場　所：ZOOM によるオンライン開催
講演者：Dr. Siniruddha Dash（University of Madras）
出席者：Dash Shobha Rani ほか

日　時：2021 年 11 月 8 日㈪9 ：15～10：45
場　所：ZOOM によるオンライン開催
講演者：P. R. Mukund, Ph. D.（Professor of Electrical Engineering, Rochester Institute of Technology）
出席者：Dash Shobha Rani ほか

日　時：2021 年 11 月 22 日㈪17：15～18：45
場　所：ZOOM によるオンライン開催（Heidelberg University）
講演者：Prof. Fr. Monika Boehm-Tettelbach
出席者：Dash Shobha Rani ほか

日　時：2021 年 12 月 13 日㈪17：15～18：45
場　所：ZOOM によるオンライン開催
講演者：Dr. Mamata Mishra（Prof. k. V. Sarma Research Foundation, Chennai）
出席者：Dash Shobha Rani ほか

東京分室指定研究

【出張】

◇ 2022 年 3 月 2 日㈬～2022 年 3 月 3 日㈭

出張先：大谷大学（京都市北区小山上総町）（全員）
佛教大学（京都市北区紫野北花ノ坊町 96）（青柳研究員）

要　務：東京分室座談会への参加（全員）
指定研究に関わる資料調査（青柳研究員、荻研究員、陳研究員）

出張者：井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿

【公開研究会】

◇東京分室指定研究研究会

日　時：2021 年 11 月 15 日㈪14：40～17：00
場　所：ZOOM によるオンライン開催
講演者：西村晶絵（盛岡大学）
出席者：井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿ほか

◇東京分室座談会

日　時：2022 年 3 月 2 日㈬
場　所：大谷大学（京都市北区小山上総町）
講演者：井黒忍、西村晶絵、大澤絢子、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿ほか
参加者：井黒忍、西村晶絵、大澤絢子、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿ほか

【公開シンポジウム】

◇仏教と障害―障害者運動の歴史的展開と仏教から考える共生社会―

日　時：2021 年 10 月 17 日㈰14：00～17：30
場　所：オンライン（Zoom）
講演者：廣野俊輔、頼尊恒信、大河内大博、難波教行（コメント）
出席者：井黒忍、青柳英司、荻翔一、鍾宜錚、陳宣聿ほか

◇宗教といのち　日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える

日　時：2022 年 2 月 12 日㈯14：00～17：30
場　所：ZOOM によるオンライン開催
講演者：渕上恭子、金田諦晃、鍾宜錚、藤枝真（コメント）
参加者：井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿ほか

個人研究 荻班

【出張】

◇2021 年 10 月 3 日㈰

出張先：東京福音教会（東京都荒川区東日暮里 2-45-9）
要　務：東京福音教会創立 97 周年記念礼拝の参与観察
出張者：荻翔一

◇2021 年 10 月 24 日㈰

出張先：東京福音教会（東京都荒川区東日暮里 2-45-1）
要　務：日曜礼拝の参与観察
出張者：荻翔一

◇2021 年 10 月 31 日㈰

出張先：東京福音教会（東京都荒川区東日暮里 2-45-1）
要　務：日曜礼拝の参与観察
出張者：荻翔一

◇2021 年 11 月 4 日㈭

出張先：川崎市ふれあい館（神奈川県川崎市川崎区桜本 1 丁目 5-6）
要　務：研究に関する教会資料を複写
出張者：荻翔一

◇2021 年 11 月 7 日㈰

出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町 4 丁目 5-1）
要　務：日曜礼拝の参与観察
出張者：荻翔一

◇2021 年 11 月 11 日㈭

出張先：タカセ池袋本店（東京都豊島区東池袋 1 丁目 1-4 タカセセントラルビル）
要　務：東京福音教会の信者に対しインタビュー調査
出張者：荻翔一

◇2021 年 11 月 20 日㈯

出張先：東京福音教会（東京都荒川区東日暮里 2-45-1）
要　務：奉仕活動の参与観察及び信者へのインタビュー調査
出張者：荻翔一

◇2021 年 11 月 21 日㈰
出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町４丁目 5-1）
要　務：日曜礼拝の参与観察
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 5 日㈰
出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町４丁目 5-1）
要　務：日曜礼拝の参与観察、信者へのインタビュー調査
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 7 日㈫
出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町４丁目 5-1）
要　務：担任牧師へのインタビュー調査
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 10 日㈮～2021 年 12 月 14 日㈫
出張先：在日韓国基督教会館（大阪府大阪市生野区中川西 2-6-10）
日本基督教団洛南協会（京都市南区東九条北烏丸町 20）
要　務：研究に関連する教会資料の複写、KCCJ 歴史研究会への参加。
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 18 日㈯
出張先：島嶼会館（東京都港区海岸１丁目 4-15）
要　務：分担執筆した書籍の書評会に参加するため。
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 25 日㈯
出張先：東京福音教会（東京都荒川区東日暮里 2-45-9）
要　務：受洗式・降誕礼拝の参与観察のため。
出張者：荻翔一

◇2021 年 12 月 26 日㈰
出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町４丁目 5-1）
要　務：礼拝の参与観察および信者へのインタビュー調査のため。
出張者：荻翔一

◇2022 年 2 月 6 日㈰
出張先：在日大韓基督教西新井教会（東京都足立区西新井本町４丁目 5-1）
要　務：日曜礼拝への参加、調査協力者との顔合わせ。
出張者：荻翔一

個人研究 陳班
◇2021 年 11 月 17 日㈬
出張先：岩船山高勝寺（栃木県栃木市岩舟町静３）
要　務：岩船山高勝寺における胎児の生命観念にまつわる儀礼実践の側面に関する調査。
出張者：陳宣聿

◇2022 年 3 月 19 日㈯～2022 年 3 月 21 日㈪
出張先：大杉神社（茨城県稲敷市阿波 958 番地）
稲敷市立図書館・稲敷市歴史民俗資料館（茨城県稲敷市八千石 18 番地１）
要　務：大杉神社の儀礼調査および宮司へのインタビュー調査
稲敷市立図書館・稲敷市歴史民俗資料館での文献調査
出張者：陳宣聿

一般研究 松川班
【出張】
◇2021 年 10 月 22 日㈮
出張先：古代オリエント博物館（東京都豊島区東池袋 3-1-4 サンシャインシティ文化会館ビル７階）
要　務：一般研究に係るコレクション展示の観覧
出張者：松川節

◇2022 年 2 月 12 日㈯～2022 年 3 月 4 日㈮
出張先：モンゴル科学アカデミー考古学研究所（モンゴル）
オロンバイシン遺跡（モンゴル）
モンゴル国立大学（モンゴル）
要　務：一般研究に係る調査研究
出張者：松川節

一般研究 鈴木班
【出張】
◇2021 年 12 月 19 日㈰～2021 年 12 月 20 日㈪
出張先：愛知県設楽町名倉村
要　務：研究課題「地質学からみた日本文化論の新構築」に係る岩石信仰の調査

出張者：鈴木寿志、吉川宗明

◇2022 年 3 月 16 日
出張先：奈良県奈良市・生駒市
要　務：研究課題「地質学からみた日本文化論の新構築」に係る岩石信仰の調査
出張者：鈴木寿志、清水洋平

『研究所報』「研究交流」に関するご案内

真宗総合研究所では今号より新たに研究成果の発表、研究に関する交流の場として『研究所報』に「研究交流」を新設いたしました。「研究交流」は真宗総合研究所に所属する全ての研究員の皆様がご投稿いただけます。

研究成果公開の場として是非ご利用ください。

『研究所報』は年に２回刊行し、そのすべての号において「研究交流」の原稿を募集予定です。

次号（81号）の募集要項は以下の通りです。

・投稿申請〆切：2022年９月30日（金）17：00まで
＊以下２点をご提出ください。
『真宗総合研究所　研究所報』「研究交流」投稿申請・承諾書
『真宗総合研究所　研究所報』「研究交流」投稿における不正行為防止に関する誓約書

・原稿提出〆切：2022年10月31日（月）17：00まで
＊データにて kenkyusyo@sec.otani.ac.jp までご提出ください。

『真宗総合研究所　研究所報』「研究交流」投稿申請・承諾書、『真宗総合研究所　研究所報』「研究交流」投稿における不正行為防止に関する誓約書および「研究交流」のフォーマットについては、別途、真宗総合研究所事務局までお問い合わせください。

真宗総合研究所　事務局
E-mail：kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

研　究　所　報　第 80 号

2022 年 9 月 1 日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2022 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute